
異世界ファイター

谷口エイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ファイター

【Zコード】

Z9761T

【作者名】

谷口エイジ

【あらすじ】

剣道が強い事が突出しているだけで、どこにでもいる一般の高校生が、ある日、気づかぬ間に異世界に…しかしその異世界では、彼は、一般人の上を行くような存在であった。ちなみに、剣道の話ではありません。

PROLOGUE 始まりへのカウント・ダウン（前書き）

はじめに

更新は不定期です。（しかし、一週間以内をメドにがんばります。）

基本的に、感想などをいただくと、助かります。
原動力になつたりもします。

一話の文が短いですが、時々すぐ長くなります。
作者の力不足によって、区切りを見破れないからです。

PROLOGUE 始まりへのカウント・ダウン

西暦2300年。

地球の方ではの話だが。

なぜそんな言葉がでるかつて？

それは、俺が異世界にいるからだ。

そして、俺は叫ぶ。

「ユーリはどうだ〜！〜！」

【異世界ファイター】

時は先程の叫びから、約一日前へとさかのぼる。

その日、土曜日であつたが、俺は休日にも関わらず、早起きをした。

ちなみに、今になつて悪いが、俺の名前は、田中直人。

生粋の日本男児である。

そんな俺が休日の朝に起きているかといつと…、

「ヤバい。剣道の試合に遅れる！」

俺は、剣道部に所属している。

ちなみに今は、高校三年生。

引退がかかったこの年で、華麗につかんだ関東大会への切符。更に、インターハイへの出場にも夢ではないところにいる。そんなときに遅刻なんてしてはいられないのだ。

「行つてきま〜す。」

親からの独立と言つ」とも含めて、田舎から東京に単身で出てきたため、家には当然自分しかいない。

その家に響きわたつたその声は、實に……といつよつ、インターハイを目指す人なのかなと問いたくなるほどに、のんきとした声であった。

「都立第三体育館」

走つてくる影、それは、玄関前で止まつた。

「はあ～、良かつた。一番乗りか……。」

直人は、話によれば、一番に会場に到着した。

「いや、一番だぜ。部長。」

實際には一番目だったのだが……。

そこにいたのは、副部長の稻葉だった。

「稻葉か……おまえやけに早いな。」

まだ息も絶え絶えな直人は、こちらに向かつてくる稻葉の方を見ながらそういう。

「部長が遅いだけですよ。俺はいつもの時間です。」

「そりか？」

時計を見てみると、集合30分前。

「いつもなら、1時間前には来てるはずだぜ?」「まあ、変な夢見て、ちょっとな…。」

変な夢、それは、自分が異世界にいく夢であったと、後の田中はそう言つた。

「まあ、今は試合のことについて考えるか!」

夢のリアルさと生々しさをまた思い出してしまった直人は、無理矢理頭を切り替えた。

ちなみに、今日は県予選の最終日。

既に関東大会への出場を決めている両者は、実は決勝で当たることになる。

県予選の最終日という事で、個人戦の決勝のみを行う大胆な作り方だが、そこは一時目を瞑ろう。

つまり、田中と稻葉が、対戦するために、1日使うのだ。

更に、県予選で優勝すれば、関東大会なしに、インターハイへの出場が確定する。

両者とも絶対に負けられない。

時間は過ぎて、いよいよ最終日がスタートした。

最初は、前日までに行われた団体戦の表彰。

もちろんこの二人の率いるチームは、優勝こそならないが、準優勝。関東大会への切符をつかんだ。

そして、その後、二人のためだけの試合が始まる。勝てばインターハイ、負けても関東大会。

試合時間は五分。

暑い中行われる為、神経を消費する。

「はじめ……」

試合が始まった。

両者とも一歩も譲らない。

片方の鋭い面も、相手がきれいに対処する、といった形で、一本もとれない。

試合も中盤にさしかかった頃に、赤の田中の面！しかし、これは稲葉がすんでのところで止めた。

だが、結局試合はドロー。

しかし、先ほどの面が響いたのか、判定は、三対〇で、赤の田中が見事に優勝を果たした。

その帰り道、田中は異様な光景を目撃した。

帰っている日の前には、少し残念がつた稲葉ともとれる人物が歩いているのが見えた。

田中は、それを見て走り出したのだが、稲葉が曲がり角を曲がり、自分も曲がつてみると、そこに稲葉の姿がなかつた。

稲葉は、その曲がり角から急に走り出したとは考えられないし、ましてや走つたとしても、撒けるほど近くに複雑な路地もなかつた。ましてや、近所の曲がり角というわけでもなし。

田中は、変な感じにとらわれてしまった。

↗翌日←

結局、県大会後のミーティングに、稲葉は出てこなかつた。

稲葉は、自分がどんなにひどい負け方をしようとも、完璧な勝ち方をしようと、後日のミーティング会には、必ず参加するような男

だつた。

それだけに、今回の欠席には、かなり驚きを隠せない。

他の部員たちにも、その話題があがり始めた頃、急にミーティング室のドアがノックされた。

そこには、顧問と稲葉の両親が立っていた。

そして、その両親がいきなり、

「ウチの子を知りませんか?」

泣き叫ぶような声。

両親の顔を見ただけでわかつた。

稲葉が、行方不明になつたこと。

そして、あれが稲葉であったという事。

稻葉の両親の、いきなりの宣告。全員が凍り付く中、その例外は田中だけ、すべてを知っている田中だけ。

『結局アレは稻葉だったのか…。』

今さら、田中は頭の中で後悔する。

「それにより、今からみんなで稻葉の捜索をしようと思ひ。希望者だけでかまわない。」

顧問の一聲。

その声に賛同したのは、やはり部員全員であった。丁度、現場検証をしようと思っていた田中もである。

『しかし、副部長だけあって、人望あるんだなあ。』

改めて、人を束ねることの偉大さを知った田中は、声に出さずに感嘆した。

「ありがとうございます！」

稻葉の両親は、賛同した全員に向かって、深く頭を下げた。

♪ 荒川流域 ♪

田中は昨日、あの光景を目撃した荒川流域に来た。

その河川敷から、一本住宅地に入ったところで、稲葉は消息を絶つたのだ。

「ここで…合ってるんだよな…？」

再び現場に来てみたが、やはり変わったところはない。

最早、昨日の出来事が逆に、夢だったのではないかと思えるくらいだ。

田中は、辺りを見回してみる、やはり変わったところがない、と思つたが…、

「あれ？ これは…。」

田中は地面にかがんだ。

目の前にあるのは、二つに連なったマンホール。

その他は、一面にアスファルトが並んでいる。

「ちょっと、模様が違つんだよな…。」

よく見れば、模様が違つていて。

大体、マンホールと言うのは、市区町村によって、印字されている文字やその位置が違う。

しかし、逆を取れば、同じ市区町村内であれば、同じ模様のはずだ。時々違うものもあるが、用途が違うマンホールだつたりする。

「開けてみるか…。」

そこには、大きいのと小さいマンホールと。

田中は、他の周りにあるマンホールと比べながら、まずは同じ模様のマンホールを開ける。

『ガチャ…、ジャー。』

案の定、マンホールの中には、水が走っていた。

田中は、そのマンホールを閉める。

そして、残ったのはもう片方のマンホール。
もう片方のマンホールに手をかけ、上げると、それほど『マンホー
ルの蓋』と言つたような重みは感じず、いとも簡単に開いた。

『ガチャ…、…。』

中を確認する前に、水の音を聞いたが、水の音はしない。

田中は、思い切つて中を覗いてみる。

「……！？」

中には、浅い穴の上に、ちょこんと便箋が封筒の中に入っていた。
早速、中を開けてみる。

その時、田中はなぜか、恐怖心というものを感じなかつた。

開けてみると、そこには、一枚の紙が三つ折りに。

別に変つた様子もなく、普通の感じである。

早速、中身を読んでみる。

しかし、そこには、文字…といつよりも、記号みたいなものが連な
つていてる。

「なんだこれ？なんかの暗号か？」

しかしその時、いきなり、便箋が光り出した…！

「うわっ…なんだ？！」

田中さんは、あまりの光のまぶしさに田を背けてしまった。

言つなれば、いきなり田の前に太陽光が反射してきたくらいの光だ。数秒後、光が消えたのを確認して、再び便箋を見てみると、

「あれ？ 文字が…ない。」

田中は、光のせいでおかしくなったのではないかと思いつつ、田をじゅうて見るも結果は同じ。

「どうなつているんだ？」

これには、田中もお手上げ状態であった。その時後ろから、

「先輩、なんかありましたか？」

一緒にこの近くを探している後輩が、田中の様子を見に来た。

「あ…いや…その…。」

いくら、重要なものを見つけたにしろ、何も書かれていない便箋を渡すわけにはいかず。

「何も、なかつた…よ。」

一応、じゅうておいた。

「先輩もですか？」

後輩は、田中の怪しい感じには一切気付かずに、再び手掛けた。

「はあ～、一応、持つておこうかな。」

田中は、その便箋をポケットに入れ、新たな手がかりを探し始めた。しかし、ポケットに入れたとき、再び便箋が小さく光つたのには、気付かなかった。

♪夕方♪

稻葉を捜していた部員は、再び、部室に戻ってきた。顔色を見れば、どうやら手がかりは見つけられなかつたらしい。

「手掛けり…なしか。」

同じ年の部員がそう呟いた。

それにより、また全員の顔色が悪くなる。

結局、このまま部活動は解散。

部長である田中は、先生に『手がかりなし』と伝えた。

♪血汗♪

そのままどこにも寄らずに、家に帰ってきた。

両親に気付かれないように、平静を保つてはいたが、自分でも悪足搔きだとは思つてゐる。

「どうしたの？何があつたの？」

案の定、母親に気付かれたが、

「何でもない。」

そつまつて、自分の部屋に入つていつた。

△血壓△

「何だつたんだらうな……。」

何かしら今回の事件と関係がありそつな便箋を持ちながら、ベッヂに横たわる。

一時間くらい便箋を眺めていただらうか。

すでに時刻は、10時を過ぎていつる。

「明日も早いし、寝るか。」

そつまつて、シャワーを浴びた後、眠りこついた。

⋮

一時間ぐらいたつたであらうか。

田中は、異常なまでの暑さと、眩しさで寝てあがりがさめてしまった。

『朝か?』

田中は、寝相があまり良くないために、起きてしまったとしても、すぐに目を開けることは出来ない。

さうして眩しさも相まって、尚更である。

背中の面もじつごつしていて、とてもグッドの上とは思えない。いや、最早床でもなかつた。

ようやく、目も慣れてきた頃、ゆっくり目を開けた。
開けると、大きな青空のど真ん中に太陽。

吃驚して起きあがると、そこには、一面の地面が…。

田中は、思わず叫んでしまった。

「…は？」

No.1 こぞり、異世界へ（後書き）

次話から、ようやく本編に入ります。

「ノーノーはビービーだー。」

田中は、ただ、叫ぶしかできなかつた。

ちなみに、現在田中は、地面のど真ん中。

周りには、見渡す限りの地面。

建物の影など、一切なかつた。

言うなれば、サハラが砂から地面になつて、広がつてこるような状況だ。

しかし、このまま座つたままでいても仕方がない。

あいにく、一面が地面だというのに、それほど暑くない。

まだ、夏場に剣道着を着ている方が暑い。

そんなわけで、田中は取り敢えず、今よりも状況が良いところを探し始めた。

(30分後)

「へへ、俺はビービーいるんだ?ちゃんと進んでこるのか?」

進んでも進んでも同じ景色が続く。

こうなつては、そういう錯覚が出てきてしまうのも無理はない。

しかし、さつき落ちていた小枝を差して作った田印を今のところ見つけてはいないので、ビービーかのべタな『同じじじじ』を何周もしている『現象ではないらしい。

その現象ではないとわかっている以上、歩みをやめる』と出来ないのだ。

「でも、ここは地面があるんだから、絶対ここに何か集落みたいなものがあるはずだよな？」

（更に30分後）

「よし、元気全快！」

田中は、ここの中で水の湧き出でるポイント『オアシス』を発見していた。

更に、このオアシスを少し進むと、地面一点張りだつたものが、だんだんと草や木が生えていたりするものに変化していた。

「ああ、頑張るか。」

オアシスで水を飲んで、元気に歩き出したりとしたとき、ふと自分の今の所有物が気になった。

「着ている服と…、腕時計と…、って腕時計？？」

寝ているときに時計をしている癖があったのか、腕時計も一緒に来ていた。

更に、生憎『世界時計機能』がある時計だった。

これを使って、太陽の位置からだいたいの時間を割り出したら、自分が居る場所が大体解るという魂胆だ。

しかし、そう思つて時計をよく見てみると…、

「あれ…? 点いていない。」

腕時計は、全くとして光らなかつた。

時計自体には目立った損傷はなく、更に『ソーラー発電』であるため、この日差しでは電池が切れることはまずないだろつ。つまり、上記のような原因でないとするならば、

「やっぱり、ここは異世界なのか?」

そういう結論に達してしまつ。

つまり、この条件の中で、時計が動かないとするならば、『内側に重大な損傷がある』または、『この世界では原理がないために、物理に反する』ぐらいしか結論では出でこない。

更にいえば、外傷が見あたらぬのに、内側に損傷があるとは考えにくい。

とにかく、頼みの綱を失つた田中は、少しの間、オアシスの真ん中で俯いていた。

だが、そうしてばかりもいられない。

まずは、一刻も早くこの状況から脱出することが、大事である。そう考へた田中は、立ち上がり、土だけの地面から、草が生えている地へ向けて歩き出した。

(30分後)

「すげ~…。」

田中は、つい先ほじまでの光景との変貌ぶりに、感嘆してしまつた。

「でけえな~…」

まだ、あいた口がふさがらないようだが、そこには、大きな一つの

未来都市があつた。

超高層ビルが立ち並び、電気自動車が走りまわり、さういふにはリニアモーターカーが走っていた。

勿論、地球でもないことはないのだが、ここまで技術が確立されていない。

さらに、地球での西暦2300年現在、ここまで壮大な未来都市はまだ建設されていない。

つまり、異世界だからこそ出来るものなのだと、田中はつげづく思つた。

この時点で、田中はここが異世界であることを認識しているようだ。

田中が、この未来都市を見ながら、感傷に浸つていると、

「お～い、お前さん、そこで何やつてんだ～？」

後ろから、声が聞こえた。

ここで、なぜ田中が異世界の言葉がわかるのか、などといつ突つ込みは勘弁願いたい。

田中がふり返つてみると、そこには、大きな馬車に乗つた人がこつちに向つて、手を振つていた。

田中は、早速その人の近くに寄つて行つてみる。

「お前さん、あんなどこりで何やつてたんだ？」

「ええ～つと…。」

馬車に乗つた人のいきなりの質問。

それに、田中は少しどもつてしまつた。

「まあいい。とにかく乗つて行きな。」

馬車に乗つた人は、とても親切な人だつた。

「俺は、サフランて書い。まあ、仕事はこの当たりの見回りかな？」
サフランといつ男は、この当たりの見回りをし終わつて、町に戻る
途中だつたようだ。

「しかし、変なこともあつたもんだよな。」

サフランは、俺の顔を凝視しながら、感慨深げな声を出した。

「一昨日は、お隣に人が降つてきたみたいだし……。」

サフランは、聞き捨てならない事を聞いた。

「それはどういふことだ？」

田中は、その話に食いつく。
もしかして、稻葉のことかもしれない。
更にいえば、稻葉に再会できるかもしれない。

「まあ、落ち着け。家でゆつぐつ話す。そつこや、お前の名は何と
いふんだ？」

話せば長くなるらしく。

サフランが、悪い人ではないと判断した田中は、自分の名前を名乗
つた。

「田中といふ。」

「 もういいええ、 もう その降つてきた奴の名前もそんな感じだったよ
うな。 」

更に、サフランは意味深な言葉を発した。

田中は、町の中に入った。
サフランが、うまく紹介してくれたおかげで、警備の人には、あまり怪しまれずに済んだ。

町には、外で見た風景以上のものであった。
町には、有機ELを使つた電光掲示板。
六木ヒルズなんて比べ物にならないくらいに高いビル群。
大きな街頭ビジョンでは、かなり遠くからみないと、自分の町に画面全体が入らないくらいである。
そうやって、田中が町の風景に見とれていたと、サフランがいつ言った。

「といひでお前さん、これからどうするんだ？」

そういえば、ノーマークだった。
ここ2時間、いきなりのことが多すぎて、自分の身なりを棚に上げて、町を探していた。
そのためか、サフランに指摘される今今まで、今後についで思えていなかつたのである。

「……。」

田中は、完全に固まつてしまつた。

「ならば、家の所に泊まればいい。今なら、一つ部屋が空いているからな。」

サフランが、固まつた田中を見て、そういうた。

聞くところによれば、サフランは下宿の経営もしているらしい。かなり下宿所の割に設備が良く、学生には人気らしいが、運良く一部屋あいていたといつ。

やはり、サフランはいい人のようだ。

「じゃあ、お願ひします。」

田中は、少しへこで生活させてもいいことになつた。

(下宿所 三丁目)

そこには、町の第一印象とは、かけ離れた、如何にも『下町』という感じの建物が建つていた。

ちなみに、隣には、未来都市丸出しの大きなビルが建つているが、そこは未来都市。

そこら辺の配慮も抜群で、下宿所には日が遮られることはなかつた。

「さあ、入れ。」

まず田中は、サフランの部屋に通された。

そして、サフランは部屋から出でていく。

どうやら、田中がこれから寝泊まりする部屋の、準備をしに行くようだ。

田中は、部屋を見回した。

不思議なことに、文字が読めないといったこともなかつた。

本当に異世界なのだと疑つてしまいそうだ。

そうして、部屋をある程度見回していると、用事が済んだサフランが戻ってきた。

ドカリと座ると、唐突に話し始めた。

「っこ先田のことだ。お隣の国に『異世界から来た』とか言つ奴が落ちてきたりしこ。」

十中八九稻葉のことである。

田中は、更にその話に耳を傾ける。

「やこつのはじよるとな、『チキコウ』とか何とか言つといひの『一ホン』と國から來たらしこ。」

完全に自分と同じ条件である。

この時点での稻葉だと言つことなどが確定した。

「やこに俺も連れていってください。」

田中は、呟んだ。

それに対して、リハンドは、

「おこおこ、まさかお前さん、その話信じるのかい?・巷では、『頭がおかしくなったんじゃないか?』といつて、誰も信じちゃいないぜ?・」

田中は、自分のこれまでの経緯を、包み隠さずサフランに話した。その間、サフランは黙つて聞いていた。

「ほあ~、じつや参った。まさか、もう一人同じ奴がいたとはな…。」

サフランは、別に田中を疑わなかつた。

「

それどころか、感心していったようだ。

「な、この国のこととも知らないってわけだ。」

サフランは、いきなしあつたと、今自分がいるこの国について話した。

「この国は、『カランド連邦』って書つんだ。ほとんどの奴は、『西側』と呼んでこる。」

「西側…とは?」

サフランは、この国と、この世界について説明し始めた。

「この星は、中心に大きな大陸が一つある。それが、西と東にちょうど半分になるように川が流れこんだ。そこが、国の境界線。」

「つまり、統計上、本当にちょうど半分になつたらしく。ちなみに、その川は、どちら側の領土でもないようだ。」

「カランド連邦は、その西側に位置するから、西側。ちなみに、東側はハロルド帝国。」

となると、稻葉はハロルド帝国側に落ちたことになる。

「じゃあ、そのハロルドって所に連れて行ってください。」

「それは、少し無理な話なんだ。」

無理とこののはなぜだ?といふことなのだからつか。

「今、西側と東側は、いつも着状態なんだ。」

「え？」

サフランの話によれば、現在両国は、戦争間近。原因は、この町にあるらしきのだが。

「東側は、この町を作ることによって、環境が乱れるといつて、『東側は、この町を作ることによって、環境が乱れるといつて』

らしき。」

確かに、現在の地球と同じことが言える。

では、ハロルド帝国でも同じことが言えないか？

「東側は、それを懸念して、昔ながらの町を保つていて、『田舎思想』とか言つてたな。」

「じゃあ、戦争間近だから、東側には入れないのか。」

「一般人は入れない。入れるのは、貨物船くらいかな？」

なら、稻葉にもあつて話が出来ないのか。

「まあ、いつも着状態が解除するのを待つしかないわな。」

サフランは、齒む田中を見ながら、そう言葉を発した。

（5分後）

あれから、二人とも全く言葉を発しなかつた。

その時、焦れたサフランが大きな声で一言。

「ああ～、焦れつたい。いつもいつときせ、町へ出て、ぱあ～っと、盛り上がりないと。」

その重たい空気を、一新するよいな感じ。

「アハ、だよな。今恼まなくたって、時間はあるもんな…。」

田中も、その意見に賛同した。

そして、二人は勢いよく、町へと繰り出した。

一人は、吹っ切れた、というより開き直ったように、先程の沈んだ空気を一変させて、街へと出て行つた。

「うわ～、すげーな…。」

前に述べたように、サフランが運営している下宿所は、下町の雰囲気だが、そこから一歩足を踏み出すると、そこは、最新鋭のシステムが町中にそろつっていた。

この光景に田中も感嘆せざるを得ない。

「言い忘れたが、ここはな、サラランダ連邦の首都、『シントーキヨー』だ。」

どこかで同じような名前を聞いたことがあるが、サラランダ連邦の『シントーキヨー』、ここがサラランダ連邦の中心地だ。

そのためか、至る所に、地方からのリニアや道路などがある。

場所的には、サラランダ連邦の南東地方に属し、北の方には『ホッケードー』、西には『カーンサイ』といった都市が並び、これらは、『シントーキヨー』も含めて、『サラランダの三大都市』と呼ばれて

いる。

「でもさ、今からどこに行くんだ？」

田中はふと、これからのことについて疑問を感じた。
外に出たまでは良かつたが、肝心の行き先が全く決まつていないのだ。

「あ、そうだな。どうすりかなか。」

当のサフランも、そこいら辺には、全く触れないまま出てきてしまつたようだ。

「まあ、なんとかなるだろ。」

帰つてきたのは、至極無責任な返答。しかし、田中は妙に納得してしまつた。

「そうだな。何とかなるな。」

「じゃあ俺が、この町を一通り案内してやるよ。」

そういうて、二人は町の人混みへと足を踏み出した。

「これが、女性たちのファッショソの聖地『105』だ。俺達は、『マルゴー』と略しているが、品揃えはすごいらしい。」

またこれも、少し惜しい場所を見つけた。

外觀は某渋谷の数字三桁の店とほとんど変わらないのだが、中心には『デカデカ』と、『105』の文字があつた。

「んで、ここが男の聖地、『アキハベーコ』だ。」

「え？ これが…？」

田中は、初めてこの世界と地球の違う場所を発見した。

それがこの『アキハベーコ』だ。

某AKBと名前はそれほど変わらず、歩行者天国なのだが、そこに構えている店が違うのだ。

「電気店もないし、メイド喫茶もない。」

「メイド喫茶…？なんだそれ。」

どうせ、この世界に『萌え』は、存在しないらしい。
しかし、その代わりに、バイクショップや、紳士服のお店などの所
謂『カッコいい系』が連なつていた。

更に、この時代ではすっかりレトロになつたといつて『東京レトロ』や、『山手線』と書いて『やまと線』と読む電車など、現在の地球上にどうなく似ているものが、このシノトーキョーにあることが、短時間の散策で分かつた。

更に、今やシントーキョーの顔となつてゐるらしい『シントーキョー・ヘッド』という巨大電波塔もあるらしい。

高さが1000メートルを超える言葉だといふから驚きだ。

しかし、少しの時間の探索で、田中が一番気になつたのは、やはり『リニア・モーターカー』といつても、過言ではないだろう。

更に、サランダ連邦のリニアの技術によって、曲がるといふことが、凄い。

この場合、特定の線路がないので、磁石の位置を変えれば好きなところに行くことが出来るのである。

「うわ、かつけ。凄いな。」

現在、リニアが田中の上をちょうど通過した。

更に、田中からは、車体の下を見ていた。
初めての光景だったのだろう。

きっと、地球では田中が生きている間では、実現し得なかつた光景に、田中は田を光らせて、リニアが見えなくなるまで、見つめていた。

「その一緒にきてる友にも見せてやりたいな。」

サフランの何気ない一言。

その一言に、田中は少し氣分が落ち込んでしまつた。

「おつと済まない。なんかしんみりしてしまつたな…。」

サフランは、すぐに謝罪の言葉を入れた。

「いや、大丈夫だ。それより、東側には、こういう物はないのか?」

田中はふと、思つたことを聞いてみた。
すると、サフランからこんな答えが返つてきた。

「東側には、そんな町は存在しない。たつきも言つたように、資源を重んじる国だからな。」

サフランは次のようにも言つた。

「わろそろ、拘束期間も終わつてゐる頃だから、そいつも案外向こうの国が気に入つてゐるかもな。」

サフランは、笑顔でそう答える」とによつて、なんだか自分にも笑顔が少し戻つたよつた気がした。

「でも…、俺はこっちの「シントーキョー」の方が、何かと都合が良くて、良いと思つんだけどな。」

サフランは、感慨深げに言った。

俺もそのとおり、西側の方が絶対いいと思った。

「さあ、そろそろ夜だし、帰るか。」

「え? でも、日はあんなに高いぞ。」

現在の時刻は、午後の4ラジアン半。

地球の言い方に直せば、6時くらいを意味する時間帯だ。

「太陽は、ここから急激に沈み出すんだ。半ラジアンもしない内には、完全に真っ暗だからな。」

半ラジアンは、地球で言えば、一時間弱のじとじを指す。
それを説明してもらつた田中は、

「やだ。それはやばいな。」

「だから言つてんだよ。ほら、いへど。」

さりとて、僕のカーランヒとともに、下宿所を田舎した。

ようやく下宿舎に着いたときには、すでに太陽は半分地平線の下に隠れていた。

よく見てみれば、未だに、目に見えるほどに沈み続けている。時間的に言えば、15分位しか経っていない。となると、その15分の間に、日が真南から西の地平線まで沈んだことになる。

田中は、少し息が上がりながら、サフランに立った。

「いんなに…早く…沈むんだな。」

田中が息が上がっている隣で、全く息が上がっていないサフランは、さつきまで走っていたとは思えない感じでこう言った。

「これくらいなら、まだ長い方だ。来月、同じ事したら、沈んでるからな。」

驚いた。

実は、今このちらの世界の時期はまだ春であった。

日が高さと、暑さでは夏だと思っていた。

だが実際、地球ではまだ夏に近かつたが、暦上は春だった。

そこら辺をつなぎ合わせれば、辻褄が合わないとも言い切れない。そもそも、この世界が地球と何かの関わりがあつたら、の話だが。

「さあ、これから一気に暗くなる。中に入れ。」

そういうしている間にも、また一段階暗さが増していた。

一人は寄宿舎に入った。

実は、その後10分もしない内に、町は闇に包まれた。
そんなことはあまり気にせずに、寄宿舎で二人は話をしていた。

「夜にはお前の歓迎会をしようと思つてゐる。」

「え！？別に気を使わずに。」

「なに、新しく入ってきた者を歓迎することは当たり前だろうが。」

「しかし…。」

どうやら、サフランは自分のために歓迎会を開いてくれるらしい。

「遠慮するな。いいだろ？お前等。」

「え…？」

サフランはいきなり、寄宿舎の大広間に向けて話し出した。
すると、大広間の戸がスースと開いた。

「おう、準備はバツチリだぜ！」

「腹減つた。早く始めようぜ。」

「新人さんは…、えらい背高いやないか。」

「いや、あんたが低いだけや…。」

中からは、すゞくテンションが高い四人が顔を出していた。
田中にも優しく（？）声をかけてくれている。

「おうおう、今いくから待ちーな。」

サフランは、先にあのグループの輪に入ってしまった。

「お前さんは、着替えてから降りてきな。」

サフランはそう一言。

しかし田中は、実際自分の服という物は、地球からそのまま持つてきたジャー・ジしかなかった。

サフランにそれを言うと、

「 いじりちで手配済みだよ。 」

そう言つて、指を指した先にいたのは、あの四人だった。

「 一生懸命選んだんだぜ？ ！ 」

「 大人服売り場に行くとは、やつぱり背が高いんじやないか？ 」

「 だから、お前が低いんだって。 」

今度は、一人してのツッコミ。

最早、息があつて いるとい う域を越えていた。

「 ホラ。 着替えてここよ。 」 こいつらの服のセンスは、保証しねえ一
けどな。 」

「 ちよ…、 それどういう意味ですか？ 」 「 」

田中は、五人の会話を横に聞きながら、自分の部屋へと向かつた。すると、自分のベッドの上に紙袋が一つ…。

「 これがその袋…だよな。 」

見てみると、大きな紙袋が一つ、三つパンパンに入つていた。

大人の衝動買いの一周りぐらい上をいく量である。

田中はその中で、比較的夜にあつて いる そ うな服を着ていいくことにした。

ちなみに、田中は服という物に頼着はないのだが、適当に選んだ服

「…してはまあまあの出来であった。

「…れで…いいよな？」

その奇跡的な組み合せにも、気付かないまま、下に降りていった。

「お、来たみたいだぞ。」

部屋の中から、サフランの声が聞こえた。

その声に少し緊張したが、思い切って中に入つてみた。

「…なん…どうだ？」

みんなに見せてみると、みんなは何故だか固まつてしまつてこる。みんなの反応に、田中は恥ずかしくなつて、着替えにこいつと思つたが、

「似合つてゐな…。」

「俺たちにも、『センス』つてあつたんだな。」

「お前等、なかなかやるじやないか？」

田中は無性にうれしくなつた。

「ホントか？似合つてゐか？」

田中は、かなり上擦つた声を上げながら、自分の席に座つた。

「よしそ、みんな座つたところで、やるか？」

「お、待つてました～！」

「腹減つたぜ～。」

「んじや、乾杯！」

「「「「「「かんぱーい！」」」」」」

一同は、お酒…ではなく、お茶を片手に、高らかに張り上げた。

「なあ、お前違つ世界からきたんだって？」

「どんな世界だつたんだよ！？」

「え…あの…一個ずつ。」

乾杯の音頭が終わつたとたんに、みんなが田中の元に質問責めをしてくる。

いつの間に広まつていたのか、もうほか全員に異世界から来たという事が知られていた。

「おいお前ら、こいつが異世界から来たことは、絶対に口外するんじゃないぞ。」

サフランの警告。

それは、田中が一番恐れていたことだった。

「分かつてますって。」

「俺たちを誰だと思つてるんです。」

「まあ、お前たちには実績があつたか。」

「びひやひ、回じよひなことが前にあつたようだ。

「一回、今よつ向ひの国から、転校生が来たことがあつたんだ。」

話によれば、その人は、ハロルドから來たことを下宿の人だけ言つたらしく。

「気にすんなつて～、絶対しゃべんないから。」

「それもやうだな。」

下宿舎は笑いに包まれ、そして、その日は、ほぼ夜通し灯りが点いていたといつ。

あの大宴会が行われた次の日、田中はサフランと共に、サフランの仕事である『首都周辺の見回り』を行った。

下宿舎は、サフランが仕事に、ほかの三人は学校に行くため、何もしないままだと、田中が一人でいることになってしまいます。というわけで、一応何かすることが見つかるまで、サフランの同行をすることにした。

「今日は午前中にあがる。それが終わったら、お前のこの世界の勉強がてら、俺が一つ世間話をしてやる。」

田中は、この世界に住む以上、この世界のことを知りたい、サフランにお願いしていた。

「まあ、今もやってやらなにこともないけどな。」

しかしサフランは、見回りをしながら話をすると言じ出した。どうやら、見回りをしているはしているが、大したことは滅多に起きないらしい。

良くて、市内にある腐食した看板の破片が飛び散ったぐらい。田中みたいな、人が他の所から広大な大地を通ってきた、なんて事は、この仕事を数十年してもお目にかかれないと、貴重な物だつたらしい。

当のサフランも、『収入は良いけど、暇がない。』と愚痴つていたくらいである。

「本当にのびかだな。」

本当にこの仕事がいるのか、と聞こたなくなるくらいで、何もなかつた。

そして、サフランは世間話を一つ、田中にほなした。

「実はな、この頃、サランダでは若干気温が上がっているんだ。」

サフランは、この国の抱えている問題について語り始めた。
どうやら、その問題とは『温暖化』の事らしい。

「ここ数年間で、平均気温が一度ほど上がっているらしい。」

地球では、確かに300年くらい前の21世紀に回りよくなことがおこったと、歴史で習つたことがある。

「それって、やっぱ二酸化炭素のせいなのか?」

田中は、歴史で習つた知識を活用して、サランダに質問してみた。

「なんだ? その『二サンカタンソ』って?。」

サフランは、怪訝そうな声色でいつもを見ている。

どうやら、この世界では、二酸化炭素は存在しないらしい。

「確かに、『カーボン・ダイオキサイド』とかいう、難しい名前だつたぞ。」

田中は、驚愕した。

ちなみに、『カーボン・ダイオキサイド』とは二酸化炭素の英語名である。

その『カーボン・ダイオキサイド』という難しい言葉が使われ、一

「それを、地球では『酸化炭素』といつて言つんだよ。」

田中は、それをサフランに教えてやつた。

「へえ…、なかなか言いやすい言葉が、地球にはあるんだな。」

サフランは、それに対し、感心したようにこちらを見ていた。

「でも、その『カーボン・ダイオキサイド』発生の直接的な原因って、何なんだ？」

因みに、地球は経済成長による、急速な『酸化炭素の垂れ流しが原因である。

しかし、一日間見て回った感じでは、そのような施設や煙突などは見受けられない。

「それが、まだ詳しいことは分かつていらないらしいんだ。だが、見ているように、数年前の光景とは一目瞭然だ。」

話によれば、この辺り一帯は、昔は緑に包まれていたらしいが、その数年の間に、田中が歩いていた、一面緑なし、の世界になつてしまつたらしい。

しかも、それが大規模だと言うから、更に驚きである。

ちなみに、田中が自分の目で見たのは、全体の何百分の一にも過ぎないらしい。

「それがまた、戦争の火種になるかもしないしな…。」

どうやら、カーボン・ダイオキサイドの発生によつて、サラランダ連邦だけでなく、隣のハロルド帝国の生態系まで、脅かしているらしい。

そして、それによりハロルド帝国側は、怒り心頭、とこうことである。

「そ……それじゃ……。」

最悪の場合、稲葉と戦わなくてはならなくなる。

その前に、稲葉を奪還しなくてはならない。

「だが、IJの問題が浮上してきたのは、最近ではない。」

この問題が浮き彫りにされ、両国で議論を生んだのは、約一年前のこと。

それから、サラランダ連邦には、めざましい進展は今のところ、何も見られないという。

さすがに、一年間もハロルドの警告を無視し続け、挙げ句の果てに、状況を悪化させたとなると、本当に戦争になりかねないかもしれない。

「何か打つ手はないのか？」

田中は、やつサフランに聞いてみるが、

「さつさも言つたら？ 直接的な原因が分からないつて。実を言つと、此處に広がつていた縁は、誰も切り倒していない。自然消滅したんだ。」

田中はその言葉に、愕然とした。

縁が自然消滅？

あり得ない。

そんなことがあっていいのか？
もしあるといふのならば…

田中は、ぬるまじい発展を遂げたシントーキョーを眺めながら、こ
う囁いた。

「これは、警告…なのかな。」

「え？」

その囁き声は、とても小さな声だった。

そう、隣にいるサフランでさえも聞こえなかつたほど。

「いや、IJの星からの警告なのかもしれない。こんなに、一気に發
展しちまつた、町に対しての。」

「つまり、その変化のスピードで、この星が追い付けなくなつた、
つてことか？」

「多分ね…。」

二人の出した考察は、理にかなつてはいないかもしれないが、妙に
説得力があつた。

何だか、重たい空氣に包まれてしまった車内。その嫌な空氣を払拭すべく、サフランは、田中に對してこんなことを聞いてみた。

「お前は、向こうの国で何かしていたのか？」

おそれくスポーツの話題だらう。

こちらの国も、地球と同じく、スポーツが栄えている。下宿仲間も、なんらかのスポーツをしていると聞いたが、やはり地球との決定的な違いが出てきたと言うべきなのか、全く知らないスポーツ名ばかりが、出てきてしまった。

その経験があるだけに、自分のしている剣道のことを出していくのには、気が引けた。

「え…、えっと…。」

結局、じもつてしまつ。

するとサフランは、このようなことを書つた。

「何もしてないのか？惜しいな～。なんなら、俺がケンドウの一つや二つ、教えてやるうか？」

田中は、よく耳慣れしている単語を言葉の中に聞いた。

ケンドウ…？剣道！

そう感じ取ったときには、サフランに何かを聞かずにはいられなくなつた。

「剣道つて…、どうこう」とですか？」

「いや、剣道は剣道だよ?」

その後、話を聞いてみたら、どうやら剣道はこの世界でもあり、同じようなルールであった。

「帰つたら、少しやつてみるか?」

「はい、是非。」

仕事が終わつたら、少し一緒にやらせてくれるそうだ。

その後、午前中のみであった仕事は、剣道の話を筆頭に話題が膨らみ、あつという間に終わりを告げてしまった。

そのまま、見回りから市内へ戻りつとしたとき、

「はい、止まつて~。」

「ヤバ~。」

ちょっとした問題が発生してしまつた。

それは、市内へ出入りするための検問であつた。

それが問題である理由としては、田中が車内から顔を出していたことだ。

実は、行き道では、あまり素性を知られたくないと理由から、車内に隠れていた。

しかし、帰り道では、剣道での話が弾み、つっかり車内に戻るタイミングを逃してしまつた。

「お~、オッサン。いつもご苦労さんだ。」

「ええと、サフランと、それから~…。」

これは少しまずいと思つたが、サフランも検問のおじさんとの気を逸

らやうとしたが、そうはいかなかつたよつだ。

しかし、その後のおじさんの発言に、田中は少し耳を疑つてしまつ。

「田中…直人かの？」

おじさんはそこで一回、口を開ざす。
さすがに見慣れない名前であるだらう。
しかし、その後、

「ほう、お主が昨日落ちてきた若い奴か。サフランの所で世話をな
つとつたんじやな。ホレ、通つてよいぞ。」

おじさんは異世界から来た田中の存在を、認めてくれた。
ところよつ、自分がこんなに有名になつていていたの、少し戸惑つて
いた。

「まあか…、昨日のバレちゃつてた？」

サフランは、そのおじさんに尋ねる。

「当たり前だ。俺に隠し事をするなど、百年早いわ。」

おじさんは、昨日の時点から氣付いていたらしい。
つまり昨日から、田中のことを認めていたという事だ。

「ま、『悪をしなければ』、ワシもそんなに鬼じやない。」

一点だけ妙に強調された部分があつたが、おじさんは微笑みながら、
田中に話した。

それに田中は、少し泣きやうになつたのを堪えた。

無事に検問をクリアした一人は、町に入り、乗っていた馬車を仕事先の場所においていた後、歩きで下宿舎まで行くことになる。その間に、サフランに剣道のことについて聞いてみることにした。

「サフランは、剣道でどれくらいなんですか？」

早く言え、段位を聞いているのである。

因みに地球では、力量と年功序列が基本だが、やや年功序列に偏っている部分もある。

「俺は、『四段』だな。来年くらいで『五段』も夢じやないかもな。」

四段といえば、初段をとつてから、六年位しないとそれない物だ。自分とあまり年が違わないと思っていただけ少し見くびってしまったかもしれない。

ちなみに、田中が三段であるが、これでもかなり速いペースだ。更に、サフランの話では、段位を取得するための試験は、毎回一発合格であつたらしい。

「しかし、年功序列制にはかなわないな。」

サフランは、独り言をつぶやいた。

その後もつぶやく。

「後一年したら、やつと『五段』なんだよな。」

田中は、その言葉の真意について訪ねる。

聞けば、この国も地球の剣道と同じように、年功序列が物を語つら

しかし、地球の剣道と同じく、段位を取得したら、一定期間の修練が必要らしい。

「審査員の人にも、『年功序列さえなかつたらぬ』、惜しい人だ。とか、言われちまつてな。」

つまり、今は四段であるが、それ以上の実力があるといつ事なのだろう。だが、段位はしたではあるが、一応全国大会に出場する田中。それなりの強さを持つている。

「一本、手合わせ願えますか？」

田中は、少し立ち止まり、お辞儀をした。サフランは、それに対して、そんなにかたくならなくとも良い、と言つたが、やはりこの国の武士道と言つたものか、

「ううううう、よろしくお願いします。」

田中に対して、やや深く一礼した。

しかし、固い挨拶はそのままに、再び下宿舎まで、話をしながら帰つて行つた。

～お知らせ～

一応、作者も学生ですし、これから『一学期期末テスト』や『夏休み集中補習』などがあり、簡単に更新するのが困難となってしましました。

とこのことと、誠に勝手ながら、七月の更新は、今回を持って終了とさせていただきます。

この間に、少し学業の方に身を傾けさせていただくこととなりました。

なお、次話は、8月1日（月）とさせていただきます。

今後も、変わらぬご愛顧をよろしくお願ひいたします。

著者・谷口エイジ

久し振りな更新です。

まあ、三週間くらいあけたから、大作でしょ、とか思つてるあなた。

そんな訳ないですよ。

つてか、いつもより出来悪いかも…

下宿舎に帰つてきた。

当然のように下宿仲間の三人は帰つてきておらず、大広間は静まり返つていた。

ちなみに、三人とも高校生である。

ひとまず一人は、休憩を取つたあと、昼食の時間とした。
 メニューとしては、『ご飯』『味噌汁』などの和食から、『ムニエル』などの洋食、さらには『焼売』といつた中華料理まで、たつた一人前の昼食に、和洋中が惜しげもなく勢揃いしていた。
 これがこの国的一般的な食事だという。
 なかなか贅沢な食事である。

「ていうか、こんなに食べられますかね？」

田中がそう声を上げてしまつほどに、量が半端ではなく多かつた。
 昨日の歓迎パーティーほどではなかつたが、少なくともお昼に食べるような量ではない。

しかし、ござ食べ始めてみると、料理が余りにおいしかつたためか、あつという間に、すべて平らげてしまつた。

「すごくおいしかつたです。ありがとうござります。でも、多くなかつたですか？」

田中は、率直な感想と、同じく率直な疑問をサフランに投げかけた。

「別にいつも」とや。『れくら』で音をあげてたら、晩御飯は知らないからな。」

それを聞いた田中は、当分はこの国の食文化には慣れないな、と思つた。

その後、食器洗いの手伝いをしながら、いろいろな文化について教えてもらつた。

中には、地球でも通用する文化だつたり、それをやるのは失礼に当たる文化だつたりいろいろ、宇宙は広いんだなと改めて田中は感じた。

さて、それが終わつた後は、いよいよ剣道の稽古にはいる。場所へは、ここから近いらしいのだが、田中にあつた道着や防具を買つたりしなければならないので、その店を回つてから行くことにした。

「へい、いらっしゃい。」

中に入ると、かなりの高齢の老人が、いすに腰掛けて面を磨いていた。

顔がいかにも、武道一筋という顔をしており、磨いている面を見る目も、真剣である。

「おや、サフラン。久しぶりだね。今度は何を買いに来たんだい？」

その老人は、こちらを見るとすぐに立ち上がり、サフランの名を呼んだ。

「いや、俺じゃないんだ。ここの方だ。」

そういつて、田中の方を指さした。

田中は、その老人にペコリとお辞儀をする。

「ほう、お前さんが例の事件の…」

やはり、この老人も自分のことを知っていた。
ここまで自分のことを知っている人が多いとなると、有名人という括りでは收まらない気がしてくる。

そんなそわそわした気持ちを抑えながら、竹刀などの道具を選んでいくが、その道具としても、重さや寸法などは、地球のものと大して変わらない。

しかし、価格としてはこちらのほうが、比較的安価である。

「いんなに安くていいんですか？」

地球とでは、通貨が違うからかもしれないが、いろいろな相場の相対的観点からしても、こちらのほうが比べ物にならないくらいに安い。

「まあ、この国では、剣道は盛んだからね。一般的なものは、工場で大量生産されてたりするから、コストがそんなにからないんだよ。」

詳しく述べてみたところ、サランダでは、スポーツの中では一、二を争うほどの人気スポーツであった。

そのためか、大量生産でないと生産が追い付かないらしい。それにつられてるように、コストも安くなつていつたらしい。

店を出て、道場へ向かっている途中でも、といひで、剣道の道具を持っている人を見かけた。
道場へ着いてみると、先客はすでに何人もいて、みんな思い思いに剣道を楽しんでいる。

田中は、その光景を見て、すく懐かしいと思つともひ、

『稻葉も向ひつて楽しんでゐるといいな…。』

と友達のことを思つた。

いや、稽古を始める。

そして、防具もつけてみるが、あまり違和感はなく、代わりに、こんなにフィットしそうで良いものなのかな、と違つ違和感が浮かび上がりてしまつてくらくなのだ。

「よひしへお願いします。」

勿論、サフランが上座に座り、一人はお辞儀をした。先ずは、基本打ちからおさらいを始める。ここは特に、サフランは言つことはないようだ。基本が完璧なら、強い証拠でもある。

「よし、実践練習するか。」

サフランの一言で、実践練習へと移行した。実践練習は、大体が試合形式で行われる。つまり、サフランは田中と『サシ』で勝負するつもりで。実の所サフランも、田中がここまでやれると言つことに、驚いている。

一人は、蹲踞をしたまま、お互いを見つめる。

『ドン…。』

いきなり大きな太鼓の音が鳴つた。

本物の太鼓の音ではないが、スピーカーから出ているらしいその音は、殆ど生の音にしか聞こえなかつた。

両者共に、間合いを整えている。
と、そのとき、

「行くぞ！」

先に仕掛けってきたのはサフランである。
面を打つてきただが、寸での所でかわす。
実は、この避け方は作戦であり、相手に空振りをさせ、素早く打ち
込むのであつたが、きれいにサフランは引っかかつた。
案の定、サフランの面は空を切り、素早く回り込んだ田中が面を打
ち込む。

しかし、完璧であつた作戦は、最後に突き崩される。

田中の面は、何故か空を切つたのである。
更に、体勢が悪くなつていていたサフランはそこにはいない。
そして、最新鋭の機械からは、サフランの『胴あり』を示すランプ
が光つっていた。

これからは、週一回以上の通常更新に移ります。

みなさん、『迷惑をおかけしました』ことを、お詫び申し上げます。

完全に自分の勝ちだと思った。

しかし、そこには面を打ったという感触はおろか、サフランの姿がない。

更には、自分の負けを示すランプが。

田中は、一瞬何が起こったのかが、全く分からぬ現象に陥った。すると、先程の一瞬の出来事のリプレイが、大きなスクリーンに映し出されていた。

田中はその動きを田で追つた。

「俺が避けて、振り返つて、打つて…あれ？」

田中はその決定的な瞬間を見破れなかつた。何せ、大振りをしてから体制を少し立て直しているサフランが、次の瞬間には、自分の反対側にいるのだ。すると、都合よくリプレイは、打つた瞬間をスーパークローズで映してくれた。

「嘘だろ…。」

そこに映し出されていたのは、体勢を立て直したが、依然後ろをとられたままのサフランが、田中が振りかぶった瞬間にむき直し、そのまま抜き胴を食らわせていたのだ。しかも、田中の面をしつかりとかわして。

「嘘だろ…。」

田中はもう一度そのシーンをじっくりと考え直して、同じ言葉をつ

ぶやいた。

「うーん…、少し遅かったかな?」

それはもちろん、サフランの声。

サフランは、この一連の動きに少し不満があるらしかった。

「わづかないと、あの部分をカットしたらい。

田中がみた限り、サフランに無駄な動きは見受けられなかつたが、サフランは自分の動きに無駄があつたらしい。

「あ、あの…、あれは何だつたんですか?」

田中は、サフランによるおもてなしを聞いてみる。

「え? あ…あれかい?」

サフランは、別にいつも調子で、未だリプレイされているモニターを見た。

「あれ、どうやつてやつたんですか?」

あの技に、何かトリックがあるのでないかと、問い合わせてみたが、

「いや、別に…。普通に鍛錬したらい。

一つの文章にしたら、『普通に鍛錬をしていたらい、出来るようになつた。』 そういう感じだ。

しかし、普通に鍛錬したところで、あんな技術が身につくわけがな

い。

再び問おうとしたが、サフランの方から田中の評価が始まった。

「なかなか筋はいいな。あの三人よりも動きがしつかりしている。」

そりやまあ、一応。

田中は、心の中でうなづいたが、次の一言に黙然とした。

「動きが遅すぎるな。そんなんじゃ、この国では通用しないぞ。」

つまり言つなれば、サフランほどの速さを修得しなければ、この国のはとんどの人には、適わないらしい。下宿仲間のトリオでさえ、サフランの速さに付いて行つていぢりい。

「でも、速いだけが強さじゃないしな。」

サフランは、いきなり深い言葉を放つた。

「速いだけが『強さ』じゃない、技術力が高いだけでも『強さ』じゃない、両方がついてこるだけでも『強さ』じゃない。」

田中はその言葉を真剣に聞き、その先の真の言葉を求めた。

「その一つの混ざつ合つがつまこ者か、初めて『強い』と呼ばれる。

「

サフランはそういうことをつた。

確かにその通りだと思った。

剣道などの試合において、技術力の高さを相手に見せるためには、

それ相応の瞬発力がいる。

技術力が高いと威張つたところで、相手の攻撃への反応が遅れると、一本とられかねない。

逆に、瞬発力がズバ抜けているだけでは、チャンスに鋭い切り込みが出来なかつたりする。

その二つのベストな組み合わせが、強さを生む。

「よし、今日はここまでー早くしないと日が暮れちまつ。」

現在時刻は、午後4ラジアン（午後5時30分近く）を過ぎたあたり。

深い話をしている間に時間が経つてしまつたのだろう。

ここから下宿先まで帰る頃には、ほとんど空が闇に包まれる時間帯である。

「今日の晩ご飯は、『焼きそば』だぞ？」

この世界でも『焼きそば』は、『焼きそば』らしい。

「僕も手伝いましょうか？」

日本男子たるもの、焼きそば一つ手伝えないでビビつするか、と父に向かっていた田中は、手伝ひつけりと申し出た。

「ああ、じゃあお願いするよ。」

帰るための支度が済んだサフランは、荷物を持ち上げながら言った。急いで、下宿舎まで帰るわけだが、そのときでも、太陽が急激に傾き始めてくるのを見ることが出来た。

そして、下宿舎にたどり着いた頃には、太陽は3分の1ほど沈んでおり、まさにギリギリセーフといったところだ。

中に入ると、既に下宿仲間が控えており、「今日の夕飯は何だ？」やらなんやら、聞こえてきて、「焼きそばですよ。」と田中が言うと、いきなり三人はハイタッチをし始めた。

どうやら、かなり好きな食べ物らしい。

仲間の三人も加わり、焼きそばの準備をしていくときに、一本の臨時ニューステロップが流れた。

『ハロルド帝国、異世界の少年を軍に配属。』

そのテロップは数十秒にわたって流されたが、幸か不幸か、全員が焼きそばの準備に追われ、そのテロップを見た者は一人もいなかつた。

No.9 強烈（後書き）

すみません、いきなりの持論展開…。

なお、次回は、500PV／日越え（実数値607PV／日（8／1））を記念して、1～2話くらい、『稻葉編』をお送りいたします。

No.10 ハロルド帝国（前書き）

500PV／日超えを記念した、稻葉編です。

田中が落ちた2～3日前に、稲葉は、『東側』のハロルド帝国に落ちた。

地球では一日違つたが、この国では、何倍もの差が生まれている。

稲葉が落ちた場所は、早く言えば、民家の庭のど真ん中であった。だから、すぐに発見されだし、田中のようないつぱい距離を歩いていくこともなかつた。

しかし、東側に落ちた稲葉には少し苦労したことがあつた。

『言語』である。

ハロルド帝国では、地球での『英語』に近い言語が使われていた。まあ、何故近いという表現をしたかと言えば、少しアクセントが違うくらい。

それ以外は、英語とは何ら変わりはない。

しかし、残念なことに、稲葉の英語の成績は芳しくなかつた。

『語彙』や『文法』は、まあまあ出来るらしきのだが、その応用となるとてんてこ劇らしい。

つまり、基礎は出来るが、それをつまんなく活用できないといふことである。

しかし、先程も述べたように、基礎は出来ているのだから、ゆっくり解釈をしていけば、全く分からぬこととは、免れた。

なお、ここでちょっとした業務連絡だが、ハロルド帝国の会話は、すべて日本語に翻訳するので、了承願いたい。

「はは、一体どうですか？」

稻葉の発言。

ハロルドの独特的なアクセントがあるのだが、それは棒読みによつて、解決された。

確かに、稻葉にしてみれば、大会からの帰り道に、いきなり此処に落とされたのだから、疑問に思わないのも無理はない。

そして、このときに稻葉の中では、なんらかの奇怪現象であるということは、念頭に置いていたようだ。

「どうして…、ここは『ハロルド』じゃないか。」

落ちた先の庭の所有者であるおばさんは、庭の木々に埋もれている稻葉を助けた。

「ハロ…ルド？」

稻葉は思わず聞き返してしまつ。

いくら、稻葉の中で『奇怪現象』だと分かつていても、いきなり聞いたこともない名前を出されたら、困惑する。

「そうだよ。ハロルドだよ。…………ちょっと、こっち来な。」

稻葉が空から落ちてきたときの音を聞いた近所の人たちが、何事か、と集まりだしてきた。

おばさんは、それを気にしたのか、稻葉を家の中に入れ、すべての窓のカーテンを閉めた。

「お前さん、一体どこの子だい？ 空から落ちてくるし、ここはどこのだとか聞いてくるし。」

おばさんは開口一番にやつ聞いてきた。
なかなか稲葉には答えに困る質問だ。
そりやつて、稲葉がどもつていて、

「言えないなら、それでいいよ。」

おばさんは、何かを察したらしく。
皆まで言わせることはなかつた、

「まあ、ひとまず、お前さんはこの国の人に間じやないんだな？」

おばさんは、皆まで言わせなかつたが、かなりストレートな質問を
していく。

「まあ…はい。」

しかし、事実は事実なので、稲葉は肯定を示した。

「一応、明日どこかの役所に行つてみな？ 何か分かるだろ？」
「はい、分かりました。」

おばさんは、その後も何かと稲葉にアドバイスをくれた。
しかし、稲葉がおばさんの名前を教えてもらおうとしても、『いや
いや、私はただのおばさんだから…』と言られて、はぐらかされた。
なんだか怪しい…。

(翌日)

そのまま、稲葉は、寝るところまで、貸してもらつた。
その後、先に寝たのは、稲葉だったので、おばさんがどうで寝たの

かは知らない。

更に、稻葉が起きた頃には、すでにおばさんは家にはいなかつた。
そして、机の上には、朝食と、

『あなたの朝ご飯よ。食べて、お役所に行きなさい。』

と書かれていた置き手紙があつた。

稻葉は、朝食を済ませた後、ちゃんと食器を洗つてから、自分とともに落ちてきた荷物を持つて、家を出た。
そして、外にいるであつておばさんに、感謝を言おつとしたが、見渡した先におばさんは居なく、挨拶も出来ないまま、役所に向かつた。

「確か…」のあたりにあるはずじゃ…。」

稻葉は、置き手紙の裏にかかれた、一番近い役所の地図を見ながら、町中を歩く。

「あ、ここか。」

着いた先には、大きな役所。

地方の役所にしては、大きすぎやしないか、と言つてはいるの大きさがあり、完全に大通りの一角を占領していた。

「え？ でかつ！」

その大きさに稻葉も度肝を抜いていた。
だが、怖じ気付いてばかりも居られない。

稻葉は、意を決して、役所に向かつた。

稻葉は、大きなお役所の中にいた。

とはいっても、一地方役所である。

だが、その中は大勢の人でごった返していた。

ひどいところでは、『ディニーランドに来たかのようなくらい並んでいる。』

そんな一角を横目に見ながら、正面にある館内図を見た。

その中には、一つのフロアに入るだけ部署を詰め込んでおり、それが十数回にも及んでいる。

稻葉は、なるべくすべての部署を、見て回りながら、『どこに行くのがふさわしいか』と、考えあぐねていると、こんな記載を見た。

『14F 異世界人相談所』

名前からして、めぼしい場所である。

稻葉は、一応最後まで目を通して、一番めぼしい『異世界人相談所』に向かうこととした。

早速、エレベーターで14Fまで上がる。

扉が開いた瞬間、思わず稻葉は絶句した。

一階の喧噪とは打って変わって、『違う階に来てしまったのではないか?』と疑ってしまうような、人の無さだった。

ちなみに、向こうの職員も『久しぶりのお客さんだ。』と言わんばかりに、こちらも凝視している。

このままではどうしようないので、取り敢えず、稻葉は受付らしい人に確認をした。

「『異世界人相談所』は、この階ですか？」

「い、異世界人相談所ですか？……はい、あちらになります。」

受付の人の声が若干裏返つてしまつた。

稻葉は少し不審に感じながら、指された方を向くと、担当員だろうか、こちらに向かつて手を振つていた。

「ありがとうございました。」

稻葉は礼を言つと、相手はなぜか急いで頭を下げた。

動搖でもしているのだろうか…。

ともかく、先ほど手を振つていた担当員の方に向かつて歩いていつた。

すると、何故か同じ階の部署の人まで、自分の仕事を放り出して、一力所に集まつてくる。

無論、それは、異世界人相談所にだ。

「さて、いきなりで悪いんだが…、なぜ君はここにきたのかね。」

稻葉が田の前のいすに座つた瞬間に、担当員にいきなりこんな質問をされた。

「なぜつて…、君に用があるからですけど…。」

担当員の、答えが至極簡単な質問に、少し語尾が呆れ氣味の稻葉。

「おつと、すまない…。じゃあ、この質問をする。…どうこう訳があつて、ここに来たんだ？」

次は、核心に迫った質問だ。

そして、なぜか周りにいる他の部署の人たちも、頷いている。

稻葉は、昨日起こったことを、事細かに説明した。

地球というところから來たこと。

気がついたら、人の家の庭に落ちていたこと。

その人から、ここに來たら何とかしてくれ、と言われたこと。

それを聞いた担当員は、いきなり立ち上がりて喜びだした。

「やつた～、遂に俺は生き証人になつたぞ～！～！」

「はい、…え？」

予期しない展開に、思わず軽いノリツツ「ミミの稻葉」。

更に、担当員は、自分で喜ぶだけでは收まらず、自分の横に座っている他の部署の人たちに向かつて、ハイタッチをし出した。当の稻葉は、何が起こっているのかわからない。

「あの…、皆さんどうしたんですか？」

たまらず稻葉は、まだハイタッチを続けている担当員に事情を聞いてみた。

「おつと、すいません。実は、こんな伝説があるんです。」

するとその人は、昔に起こった、今でも伝説として語り継がれていることを話してくれた。

今から526年前、その一回だけ東側と西側が、対立したことがあった。

その戦争は日を追うごとにひどさを増していき、一ヶ月ぐらいたつた頃には、両方とも、ありつたけの兵力をつき込む総力戦。するとそのとき、両陣営とともに、『人が降ってきた。』と言ひ伝令が入った。

その知らせに、一時休戦という形になつて、実体の解明に急いだ。すると、二人は両方とも、異世界から来たらしい。

そして、一人の供述に共通点があることから、両陣営は、一人を会わせてみると、いきなり涙を流しました。

どうやら、友達同士だつたらしい。

そして、一人が再会の抱擁をしたとたんに、一人から光があふれ出し、次の瞬間には消えていたという。

そしてその時、両陣営の頭から戦争の話は消えてしまい、なし崩しに終戦を迎えた。

そして、その終戦を迎えてくれた二人に敬意を払い、今年の年号になつた。

「だから今年が新暦526年…つてわけだ。」

担当員は、語り終わつた後、僕を恍惚とした目で、僕をみた。

「頼む。君の力が今、必要なかもしれない。」

稻葉は、いきなり重い役目を背負つてしまいながら、少し固まつてしまつた。

「今、この国がどうなつてゐるかは、君も承知のはずだ。」

多分、サラソーダとのこう着状態のことだらう。

稻葉には、だいたい予想がついていた。

何故なら昨日、庭に落ちたところの主のおばさんに、この話を耳に

たこができるのではないかといつほび、聞かされた。しかも、そのときのおばさんの田も恍惚としていた。このままでは、救世主扱いされる、と思つた稻葉だが、それも悪くないな……、と思つてしまつた。

「分かりました。できるだけ努力します。」

稻葉はあつさり、承諾してしまつた。

「わづかー」これは、王に連絡を取らなくては……。

遂に、国を挙げての大事に発展してしまつた。
わづかーは、

20.11 稲葉の決断（後書き）

一応、稻葉編は、「」でこつたん終了です。

これ以上書くと、本編の設定を忘れてしまってから、

次回からは、再び、田中編に戻ります。

尚、若干修正点がありましたので、加えさせていただきました。

ご迷惑をおかけします。

次の日、新聞を何気なく読んでいた田中は、ふと思つた。

「あれ？俺なんで新聞が読めるんだ？」

今考へれば、不思議な話だつた。

まだすべてのことが分かり切つていない、この異世界の新聞が、読めている。

どこで詰まるといったこともなく……。

あまりにも不思議で仕方がなかつた田中は、サフランに聞いてみた。

「昔、何かあつたんですか？」

それは唐突な質問だつた。

全く話の筋が読めないサフランは、『へ？』と間抜けた声を出してしまつ始末。

「え……や……あの、すこません。」

田中はつこ謝つてしまつ。
悪い癖である。

「いや、いいんだけどよ……、どうしたんだ？いきなり。」

サフランは、そのことについてあまり気にしないようである。

「いや……、どうして俺、新聞読めてるんだ？……、と思つまつして。」

田中は、あの唐突な質問のわけを話した。

サフランは、そのわけよりも、田中がこの国の言葉が話せるだけではなく、字も読めるところの方に食いついた。

「え、おまえこれ読めんのか。」

サフランの田中は、子供のよつな無邪氣な感じであった。

「まあ、前から薄々気付いてたんですけど……、今日の新聞の一見で確信がつきました。」

確かに、田中が最初にこの下宿舎に来たときにも、やのよつな表記がされている。

この事については、20・3を参照してもらいたい。

「じゃあ、これは？」

少し田中よりも年上で、お兄さんの存在だと思つていたサフランの無邪氣な田中は、変わることはなく、確かめるためだろうか、問題を出してくる。

指さしたのは、『反面』

「『ほんめん』…でしょうが。」

地球ではそう読む。

「すっごえ、おまえ凄いな？」

「からりの世界でも、『反面』は、『ほんめん』だった。」

「じゃあ、これは？」

書いてあったのは、『觸體』。

なぜかこの言葉が、新聞に使われていた。
いつたいどんな記事なのだろうか…。

「『ビヘヒ』ですか？」

普段はカタカナで表記されることが多いこの字。

「正解だぜ。この字覚えるの苦労したな…。最初みたとき、暗号か
と思った。」

「ひらの世界では、惜しみなく漢字を使うのが一般的なようだ。

この後も、いろいろ質問に答えていくうちに、ほぼその場所の見開
き2ページ分を読み終えてしまった。

みた感じ、日本語と代わりがなかつたらしいが、ひとつだけ…。
やはり、漢字多かつた。

普段は、画数が多いため、カタカナにされやすい字や、一般人には
とうてい読めないといった漢字が、つらつらと並べられ、一文のほ
とんどが漢字である文章もあった。

「さて、そろそろこいくか…。」

一人の間で漢字の件が終わつた途端、サフランは顔をえて、立ち
上がつた。

まるで、田中の最初にした質問に行かせないかのよひに。
田中はその時、鋭い勘で、

『今は、追及するべきではないな…。』

と、察知した。

いつか話してくれるときがくるだらうと…。

現在の時刻は、午前の8ラジアンほど。

地球時刻でいう、11時前くらいの時間帯。

これから、昼をまたいで剣道場にこもるといつ。

田中もせっかくなので、同行させてもうことにした。

下宿舎から、道場までの道のりは、違う話をした。

田中もそこには、あえて追及しなかった。

道場に着くやいなや、『一発やつてみないか?』と、サフランが言つてきた。

昨日のこともあり、若干乗り気ではなかつたが、田中はそれを承諾した。

『時間無制限・一本勝負』

大スクリーンにはそういう映し出されている。

この状態は昨日と変わらなかつた。

ちなみに、この世界では、高性能なカメラが四方八方に配備されており、主にビデオ判定用に使われ、昨日もあつた『リプレイ』機能や、反則や技の入り具合を判定する『審判』機能がある。

だいたいの技は、審判機能で判定されるが、残り時間ぎりぎりの技や、コンマゼロ何秒とこの世界での、細かい技の時に、リプレイ機能が使われる。

更に、本数引き分けとなつた際には、動きの軽やかさや、勝負を仕掛けた度合いによって、優勢勝ちを決めたりすることもできる。

機械から出される始まりのブザーとともに、一人は、蹲踞の状態から立ち上がった。

にらみ合いが続いている。

田中は、昨日のことがあるために、下手に動けないようだ。最初に動いたのは、サフランだった。目にも留まらぬ、鋭い面づち。

『バアアアーン!!』

凄まじい打突音がしたが、どちらのランプも付かなかつた。

「つ…」

「へえ、もう止めるか。」

そう、田中は、サフランの光速の面うちを、早くも止めたのだ。当の本人は、かなりギリギリだったみたいだが、それでも、ある程度見切ることが出来始めた。

「なら…、これはどうだ?!!」

『バアアアーン!!』

今度は、胴への一撃。

面うちの時よりも早く、どうやら、竹刀五と持つて行くつもりだったらしい。

だが、これもランプは付かない。

田中によって、見事に一步手前で封じ込められてしまつていた。

田中の方は、かなり必死な感じであり、技をいれ終わつて、無防備なサフランのことさえも、気にしていられないようだ。

「なかなかやるな…。」

サフランも、言葉ではそう言つておきながら、内心では、驚いていたのかもしない。

「だが、これで決める…。」

『ヒュ…パシイイン…。』

今度は、空氣を切る音まで聞こえた。
入ってきたのは、小手。

「つ…くつ。」

これにも、田中は反応した。

しかし、無情にも、サフランの方にランプがともった。
これにより、田中は緊張の糸が切れたのか、フツと息をこぼした。
礼をした後、リプレイが流れた。

リプレイによると、サフランの攻撃を田中はギリギリで追いついた
が、それごとサフランに持つて行かれてしまつていた。

少し落ち込んでいるような田中の耳に、サフランの声が入ってきた。

「お前、すぐに俺を抜かすかもな…。」

「え？」

それは、独り言のようにも聞こえた。

～お知らせ～

皆さん、いつも御覧ありがとうございます。

- ・ユニーク通算10000人（実数値通算1002人・8月22日終了時点）
- ・通算50000PV（実数値通算5148PV・8月24日12時時点）

越えを記念し、再び稻葉編をお送りします。

進行具合的には、No.9の最後からへんてちりつと書いた『稻葉が軍に配属される』までです。

最悪、一ヶ月を超えてしまつかもしれません…

なお、No.13の本編の後、No.14からとなります。

これからも、変わらぬご愛顧をよろしくお願ひいたします。

（著者・谷口エイジ）

「お前、すぐに俺を抜かすかもな…」
「え？」

サフランの独り言は、田中にも十分聞こえていた。
昨日も、そして今日も、サフランに圧倒的な力の差を見せつけられたにも関わらず、何故、当のサフランから、そのよつた言葉を発するのか、分からなかつた。

「どういう事ですか？」

田中は思わず聞いてしまつ。

「いや……」Jの話だ…。」

しかし、サフランはそのことについて、口にしない。

「ほら…、もうすぐ昼だぞ。飯の時間だ。」

そう言つて、サフランは、『ソルジャー（地球でいう『ソルジャー』）で買つてきた弁当を開き始めた。

結局、サフランには、あれ以上のことをこつじしなが、はぐらかされてしまつた。

「はあ…、わかりました。」

一方の田中の方は、何か腑に落ちないままである。

時刻は、正午すぎ。

始めてから一時間、鋭い入りや、裏をかいした攻撃が、サフランから浴びせられたが、結局入ったのは、あの一本だけだった。それだけでも十分凄いのだが、それだけない。

田中は、防戦一方だった昨日から、今日は、時々攻勢に転じてみたりと、だんだんと余裕も出始めた。しかし、その攻撃はサフランによつて防がれるのだが……。

「よし、また始めるか……。」

時間は、午後の半ラジアン前。

地球でいうと、0時40分前である。

30分位で、昼食を食べたことになるが、そのあと、またすぐに稽古に入るらしい。

このまま、4ラジアン、5時20分くらいまで、稽古をする。

「はい。」

しかし、田中はそれを別に苦と感じることはないようだ。

大会前では、そんなことは当たり前であつたといふこともある。

しかし同時に、田中は、剣道に対しても、それくらいのことは大丈夫なのだ。

昼食の弁当を片づけ終えた瞬間、一人はまた準備をし始めた。

「よし、来い……。」

準備をし終えた二人。

先に声を上げたのは、サフランだった。

田中は、その声に反応して、サフランにつっこひんできた。

「やあああああーー！」

そう叫んだ後、田中はサフランのそれにも負けないような、鋭い面うちを食らわせた。

「カアアアアアンーー！」

竹と竹が激しくぶつかる音。

その音は、防音設備が整つてゐるこの部屋でさえも、防ぎきれないほどだ。少し、その音は小さくなるのだが、外の廊下を歩いている他の人も、ビックリしてしまうほどだつた。

なお、どちらも一本は入つていない。ちなみに、何でもはかるモニターでは、先程の攻撃の威力が表示されている。

『726kg

かなりの衝撃がかかつてゐることが伺える。

しかし、それを受け止めたサフランの腕と、竹刀の強度には、ただ驚嘆するばかりである。

しかし、そんなこともいつてられないのが、今の二人である。

今このように説明している間にも、二人の打ち合いは続いていた。それは、同じそのアニメで見るような、皿にも留まらぬ打ち合いである。

『カン、カ力カン、パアアンー！』

竹刀と、踏み込んだ音が絶え間なく流れていったが、一つだけ違う音が入った。

胴打ちが入ったのだ。

それを打つたのは、田中だつた。

しかし、一向にランプは付かない。

そのかわりに、審議ランプがついた。ビデオ判定のようらしい。

『パアーン！』

完全に田中の一発は、サフランの胴にきれいに入っている。しかし、少し甘く入つてしまつたらしい。

この世界では、打つたときの威力によって入つたか入つてないかが決まる。

その規定は、100kgなのだが、田中の威力は、

『94kg』

わずかに足りなかつた。

なお、審議ランプがついたときは、一時試合が中断される。

そのために、審議中は、誰も打ち込むことも、打ち込まれることはない。

そして、再び合図がなつた。

『危なかつたな。本格的に、明日にはいえられてるんじゃないかな？』

それがサフランの出した、率直な感想だつた。

No.13 天才の素質（後書き）

予告通り、次回から、稻葉編（救世主疑惑／軍隊の入隊）

No.14 Hとの闘見（前書き）

稻葉編（2）です。
2～3話くらい引っ張ると思いますが、これが終わると、じょろく
本編が続きます

一方、稻葉の方では、田中がちょいちょい落ちてきた昨日、ハロルド帝国の王との謁見があった。内容的には、ただ王にお会いするだけなのだが、非常に盛大な物になっていた。

「おお……、あなた様が救世主でござりますか。」

ハロルド帝国の王が、直々に出迎えに参られ、わざとには敬語まで使つてゐる。

非常に珍しい光景だ。

「これはこれは、滅相もございません。」

稻葉は、国王が自分に向かつて頭を下げるのを見ゆやいなや、自分もそれより更に深く、頭を下げた。

臣下たちは、王が頭を下げているのは初めてだ、といわんばかりに、ざわめいてゐる。

「早速で悪いのだが……。」

王は、いきなり切り出してきた。

「我が、王立陸軍に入つてはいただけないだろつかな?」

「……は?」

稻葉は、思わず頓狂な声を上げてしまった。

一応いつておくが、この会話の流れは、ノーカットである。

つまり王は、序章をすつ飛ばして、单刀直入に言つてみせたのだ。

臣下たちのざわめきは、大きくなるばかり。

中には、『今日の王は、どこかおかしい。』と言つ臣下もチラホラ。

「あの…、それは一体…。」

稻葉は、王に真意を問う。

「あなたのような救世主様の力で、この国を救つていただきたいのだ。」

救世主様という大それた名前を付けられた稻葉。

その稻葉は、もはやどこからツツ「んでいいのか、全く分からなくなっている。

臣下たちも、ため息をつき始めた頃、勢い良く、後ろの扉が開かれた。

「父上、そのような急な切り出し方は、やめてくださいと、何度言つたらわかるのですか。」

王のことを『父上』と名乗るひとりの女の人が現れた。

臣下たちは、いきなり開かれたドアの先にいたその女の人に、軽く礼をする。

「メリエル…すまない、癖でな。」

王はその人を『メリエル』という名で呼んだ。

稻葉はようやく、その人が誰なのかがわかった。

実は、謁見の前に、少し予習をしていたのだ。

それは、失礼に当たらないようにするといふことなのだが、余りに城下で王家の話題を聞くようで、少し好奇心もあつた。

稻葉は、メリエルという名前を聞いたとたんに、『なるほど… 王様が頭が上がらないのも頷けるな。』と思つた。

稻葉の好奇心の根源ともいえるのが、この二人の関係であった。実は、こんな一説があつた。

『陛下、今日も王女殿下に負ける。』

『陛下、口喧嘩自コワースト 18連敗。』

新聞の一面には、こんな感じの記事が踊つていた。

まあ、それ以上に大事なニュースがないだけ、平和と言つことを表しているのかもしれないが、事情を知らない人が見ると、つい好奇心をくすぐられるような記事である。

「癖癖つて、これで何度目ですか！？」

そのような昨日のエピソードを思いだしていた稻葉は、王女の怒号ともとれる声に、今に引き戻される。

臣下たちは、『また始まつた…。』といつよつた感じで、戦況を見つめていた。

「32か…」

「33回目です！！」

王は、最後まで言葉を発することができなかつた。

稻葉はこの時、別の記事でみた『陛下、これで4勝49敗』という記事の『4勝』の部分が見てみたくなつた。

そして、それと同時に、明日の記事には、『50敗目を喫する』か『連敗記録を19に』のどちらかが一面を飾るのだろうな、と勝手

に考えていた。

そうやって、まだ喧嘩をしている一人の間で、困っている稻葉。實際は困ってはいないのだが…。

それを助けるように、二人の口げんかよりも大きな声が響き渡る。

「そこまで…」

その大きい声に、臣下や稻葉どころか、未だ熱い戦いを見せてはいる一人でさえも、耳をふさいでしまった。

その大きな声を出した張本人が、部屋の中に入ってくる。

「母上…」

王女の声。

王女が『母上』と名乗る人物なら、王妃にあたる方である。しかし、稻葉はどこかで見たような感じの人だつた。

どこかははつきり思い出せないらしい。

その稻葉の顔を、『オロオロしている』と捉えた王妃は。

「全く、王家が一人もそろつて、何ですかこの有様は…」

王と王女を怒鳴りつける。

「だつて父上が…。」

「お黙りなさい。いかなる理由があつても、お客様の前で、そんな事してはいけません！」

王妃は、王女の抵抗を一瞬で排除する。

その顔は、まるで『鬼』をも連想させる。

「あなたもあなたです。お客様を困らせないような、言い方はあります」とことへ。

この光景をみた中で思つことば、一般家庭での親子の地位を表しているよつこむ力感じられる。

母親は絶対的、そして、息子・娘に、口で勝てない父親のよつな。

さて、王妃の公開説教により、カオスな状況から立ち直つた、謁見の場。

「まあ、答えは今じやなくとも良い。自分の気持ちが固まつたら、またじやひじてきてもらいたい。」

久し振りに、本来の職業に戻つたといつても良い王様は、そう稻葉に告げる。

「わかりました。」

そう稻葉告げると同時に、謁見の時間が終了した。

実際には、半分以上の時間が、王家の親子喧嘩に終わつたわけだが、それでもほかの少ない時間で、何とか最重要事項は、話すことができたわけである。

稻葉は、やることが終わつたので、早急に城を出て、ホテルに向かうことにしたがその間に、稻葉は今回のことについて気になつたことを、少し考え始めていた。

その気になつたことといえば、王妃のことである。

「誰かに似てんだよな。」

確かに、俺が落ちた時に、助けてくれたおばさんだ。

「まさか…」

「まさか…」

稻葉の頭の中では、いろいろなことが渦巻いていた。既に王様に返す返事は出来ていたのだが、稻葉的にはそうはいかないらしい。

「もうちょっと、調べてみるか…。」

いつの間にか、本来の目的を忘れ、探偵気取りになってしまった稻葉は、今考えてみれば、そちらの方が生き生きしていたのかもしれない。

さて、そうと決まれば行動に移すのが、稻葉である。ホテルに戻ると、今まで予習用に使っていた新聞を、今度は、もう一つの目的のために使い始めた。

新聞をくまなく、一字一句逃さず見ていく。

そして、それらしい記事があれば、その記事に目を通す。

そんなことを繰り返しているうちに、正午にならないうちに終わつた謁見の時間、そのすぐ後から作業を始めたが、もう外は夕闇に染まつていく。

時刻は、午後の5ラジアン15分。

この世界は、時間はラジアンを使うのだが、それよりも小さい単位は、分、秒を使う。

ちなみに言えば、地球で言うと、丁度7時。

夏場のこの星で言えば、急激に日が傾く時間帯である。

実際に、少し目を離して、もう一度見てみると、太陽の欠け方が一

目瞭然である。

「お夕食はどういたしますか？」

部屋の外からの声。
ホテルマンが、もうすぐ近づいてくる夕食の時間について聞いているのである。

「中に入れといふださい。」

稻葉はそう言つて、寝室に入つていつた。
ちなみに、部屋は一つあり、寝室とリビングに分かれている。
稻葉は、一回寝室へと移動する。
その理由は、結構みんなに顔が知れているからだ。

実際に、テレビがないハロルド帝国。

しかし、かといって、情報を得るものが一切ないわけではない。

それは、この地球もある、新聞だ。

前話述べた王家の喧嘩の件も、新聞であつたのは、皆さんも覚えていただいているだろ？

実は、稻葉の登場は、新聞の一面のほぼ90%くらいを占めていた。
更に、ハロルド帝国では、この新聞がほぼ唯一の情報源であるため
か、新聞の購読率が100%近い。

つまり、誰もが、稻葉のことを知つてゐる形になり、なにもしないまま一步外にでてしまうと、正体がバレかねないことになつてゐる。
そのため、変装をしている状態の時以外は、人前に顔をさらさない
ようにしているのである。

「では…失礼します。」

ホテルマンが部屋から出ていった。
再び稻葉は部屋に戻る。

ホテルの支配人など、一部の人は事情を知っている。
しかし、他の人は全く事情を知らない。

いくら、王様が直々に手配したといえど、国のトップ・シークレットになるような人の情報を易々と出すことはできないのであった。

「さて、晩飯にするか…。」

稻葉は、調べ物を一回やめて、出てきた夕食に手を付け始めた。
その時には、もう夕日は沈んでいた。

「次の日」

すでに、王様との一回目の謁見は、夕方と決まっていたのだが、稻葉は王様に対する返答は決まっていたので、再び王妃とあの女性のことについて、調べていた。

すると、過去の新聞より、興味深い記事が現れた。

『王妃、またもや脱走。今度は、謎の置手紙。』

これは、稻葉が異世界に来た当日の新聞である。
さらに、稻葉は読み進める。

『置手紙には、「時が来ました。』の一言のみが記されており、そのほかには何も書かれていなかった。』

つまり、稻葉が落ちてくる前日に、王妃は何かを予知していたのではないか、という予想が立てられる。

ちなみに、前述した『予習』で、『王妃には、予知能力があるらしい。』『』ということも分かつてていたので、別段稻葉は驚いてはいない。しかし、逆に王妃への疑惑は募つていくばかり。

そして、別の記事に、核心に迫る記事が書かれていた。

「『』…これは…。」

あまりに、核心までストレートに行つてしまつたので、稻葉はびっくりするしかほかなかつた。

「夕方」

ついに、一度田の謁見の時間になつた。

稻葉は、民衆にばれないよう、帽子を深くかぶつて城へと向かつた。

そして、今日手に入れた衝撃的な出来事の真相も持つて。

「陛下、一度田にお目にかかります。」

早速城に着いてから、ほとんど顔バスで、部屋まで通された。

「おお、来てくれたか。お主の中の答えは、決まつたのか？」

相変わらず、单刀直入さが表にでている王様。

それを横で見ている臣下たちはおろか、王女や王妃も、もはや溜息を付いて見守るしかないようだ。

「その話ですが、後回しにしてもらえないませんか？」

稻葉は、少したぐらんだよ的な顔をしてはいるが、それを見せない

ようにして言った。

それに対しても、すぐにでも答えがほしい王様は、戸惑いが隠せないようだ。

「どうしたの? 何かあったのか? そつなのか?」

「父上、少し落ち着いてください……。」

まるで、何かに絶望したような声で稲葉に質問をぶつける王を見かねてか、王女が、昨日ほどの勢いではないが、止めに入った。

「すいません、どうしても決着をつけなければいけない事がありまして。」

そう言った後に、稲葉は王妃の方へ向く。

「王妃様、あの日、あなたはどうしていらっしゃいましたか?」

「王妃様、あの日、あなたはビリビリしゃべりましたか?」

稻葉がそう言った瞬間、謁見の会場は、ざわめきでいっぱいになつた。

臣下の人たちは、口々に何かを言つてゐる。
ただ一人だけを除いて…。

「ちなみに、あなたは、ここには居なかつた。そうですよね。」

更に、稻葉は問い合わせを続ける。
すると、王妃はその問い合わせに答えた。

「そうね…、確かにいなかつたわ。」

これは誰もが知つてゐる事実である。

「ではあの日、あなたはどういらっしゃいましたか?」

稻葉の究極の質問。

王妃は、少しうろたえた。

それを見た臣下は、稻葉にこう言い放つ。

「貴様、王妃様に向かつて、何という口のきき方だ!…」

「やめなさい。いいのですよ。」

「しかし…」

王妃は、その臣下をなだめる。

その臣下は、素直に後ろに下がった。

「確かに、あの日私は『この城にはいなかつたわ。しかし、行先まで知つてどうすると言いますの?』

王妃は、稻葉に対する答へは変わることなく言った。

「少し貴方のお顔に見覚えがありましてね…。」「見覚え?」

王妃は、何も知らないような顔をしている。それを見ている稻葉は、更に問い合わせてみる。

「あなたは、あの日『城下町で一泊した』と書かれてありました。

稻葉は、どこぞの探偵のような雰囲気を醸し出したまま、その記事を取りだした。

「確かに…、それも真実よ。」

王妃もまだ尻尾を現さない。

だんだんと、二人は一問一答のよつた形になつていった。

「更にあなたは、繁華街の多い『西地区』ではなく、わざわざ『東地区』の方に向かつたとも…。」

稻葉は、なかなか尻尾を出さない王妃にじれながらも、質問をぶつける。

「確かに東の方に行つたけど、別に理由はないわ。」

王妃は、稲葉からの鋭い攻撃をひらひらとかわしていく。それをみた稲葉は、早急に『追い込み』にかかった。

「では、こちらの新聞、こちらの真意とは…？」

出してきたのは、昨日見た新聞の中でも、特に稲葉が驚いていた記事の一つ『王妃の残した置き手紙』についての新聞だ。

「……そ、それは。」

その新聞記事の内容をみた王妃は、あからさまに動搖をし始めた。そこに再び、稲葉の発言。

「更に、あなたはそれを書いた直後に、城下に向かった。ちがいますか？」

すっかり出来上がってしまった稲葉は、もはや誰にも止められない。

「……。」

ついに黙ってしまった。

そこに稲葉が、最後のオトシにかかる。

「そして、決定的な証拠。こちらをご覧ください。」

一言曰は、主に会場に向けられての言葉。

稲葉が取りだしたのは、何の変哲もないフォーカ。

しかし、それを取りだした瞬間、会場は一気にざわめきが起きた。その中を、稲葉は大きな声で言つ。

「そうです。これは、あなた方のお城から先日なくなつたフォークです。」

よく見ると、フォークの上部には、王家の物を示す、刻印が押されていた。

「最初、この刻印がなんのかは知りませんでした。」

確かに、このフォークを使ったのは、この世界に迷い込んだその日。いくら紋章として、ハロルド帝国旗の「デザインだからといってわかつたものではない。

「ならば、あなたはビリしてそれが怪しいと思つたの？」

王妃からの質問。

このときの王妃は、半分くらいはバレていてると確信していたのかもしれない。

「それは、このフォークが純銀で出来ていてるからです。」

そのフォークが純銀製だと、稻葉が断定できたのは、なんとその言葉を放つた後だった。

実は、最初の頃は正体が分からなかつたが、そのフォークが単なる銀製ではないことはすぐに分かつていて。だが、それがいつたい何なのかは、今日の今日まで分からなかつたのだ。

実際先ほどの言葉は、当てずっぽうでしかない。

しかし、その言葉に大きく反応したのは、周りの人間たちだったの

だ。

その周りの人たちは口々に、こう言つてゐる。

「確かに、純銀でできていたら、王室の物に違いない。」

「さうよ、言葉が飛び交つ。

このフォークが、王室の物であるという確信があるために、純銀製であるというのは、間違いないのだ。

「つまり、あなたは、あの日の方で、間違ひありませんね？」

稻葉の最後の質問。

「そうね……、あなたの勝ちよ。」

ついに、王妃は、降参を示した。

「でも、こんな事をして、どうこう事なの？」

王妃は、この場を使つた行為についての真意を問つた。

「いえ、ただの探偵まがいです。」

稻葉はそう答えたが、そこには、胸のつかえが取れたような顔をしていた。

（）

「えへ、オホン。」

その咳払いをしたのは、この数十分、完全に忘れ去られていた王であつた。

今まで、激論を繰り広げていた一人も、王の存在を完全に忘れていたらしく、少しの間、沈黙が流れている。

「もう…、よろしいですか？」

「え…？あ、はい！」

王の言葉に素早く反応した稲葉は、反射的に言葉を放つ。

「では、私どもの軍に入つていただけますかな？」

相変わらずの、単刀直入。

しかし、このときぐらいは許してもよいだらう、と会場にいる誰もが思った。

「はい、謹んでお受けいたします。」

稲葉も、最後はちゃんと、片膝をついて、承諾の意を表明した。

No.16 答え（後書き）

稻葉編、これにて当分終了です。

次回から、日常編をお送りいたします。
更に、公式戦直接対決もあるかも？

試合が再開した。

みた感じでは、昨日よりも、田中が押している場面が多く見られる
ようになった。

更に、先程は、ビデオ判定ではダメだったが、田中が一本入れるようなシーンもあった。

『畠山はいえられてるんぢやないか？』

サフランが、そんな危惧を思わせるのも無理はない。ビデオ判定で一本入らなかつた後も、田中は積極的に、サフランを攻め立てる。

また、サブランの隙をついた攻撃にも、少しすこはあるか、対応し始めている。

「なかなか、やる気にならんじゃねーの？」

20連以上にも及ぶ、長い連携技をやり終わつたサフランは、珍しく少し肩で息をしながら言つ。

その話相手である田中は、このサフランのパンボを全て見切った。更に、後ろに下がるときは、反則にならないよう、左右に下がつたりもするほど、余裕も出始めている。

今度は、田中の反撃の番。

大きな威勢のある声で、サフランに向かっていく。

「パン、パン、パパパン！！」

田中も、10連くらいの連携技を繰り出す。

更に、その一発一発が重いらしく、サフランも少し涼しい顔が崩れ始めている。

しかし、それでも田中は、サフランから一本を取ることが出来なかつた。

『ピーツー！』

突然ブザーが鳴った。

何故かと言えば、試合開始から半ラジアン（40分）経つたからだ。いくら、時間無制限の勝負であつても、40分続けてやるというのは、体の問題に関わる。

よつて、半ラジアン試合を続けた場合、原則として、10分以上の休憩を取らなければならぬことになつてゐる。

「ふう……。」

「ここまで、40分間ずっと精神を集中してはいたといつてもおかしくない田中は、軽く息を吐いて、緊張状態を解く。

「はあ～。」

一方サフランも、ここまで長い試合は初めてならしく、『緊張を解く』といつよつは、『本格的に疲れを癒やす』感じに、息を吐いた。

『何回か見たことあるけど、こんなに辛いんだな……。』

物理的に考えても、フルタイムの試合には、なかなかお皿にかかるない。

それこそ、一生に一度経験するかしないか。

ちなみに、しないという人は、『一度はしてみたい』と思つたりしない。が、経験した人は、『一度と御免だ!』と思つ人も少なくないらしい。

ほかにも、水分補給や、ストレッチなどをやっていると、10分はあつという間に過ぎていった。

しかし、一人ともその時間に試合を再開できる状態ではないらしく、その後もグダグダと休んでいる。

まあ、『10分以上』だというのだから、別に10分休んだだけで始めなくてもよいのだ。

『さて、そろそろやるか。』

結局20分位した後で、試合を再開することにした。

実をいえば、どちらとも疲れが回復したとは言い難い。

だが、疲れを全快して、体が冷えてしまつては、もつたいないといふことで、『わざわざ、片を付ける。』ような心意気である。

『一本目・再試合』

モニターには、そう映し出され、その数秒後には、試合開始を告げるブザーが鳴つた。

「つまおおおおー!」

先に仕掛けてきたのは、サフランだ。

この試合のサフランは、今までと少し違つていた。

少し、攻撃が性急になつてゐるところだ。

サフランは、体力面でいつても、まだまだ伸び盛りな年。更に、その体力は、平均を超えるほどだ。

しかし、そのサフランでも、40分連続はきつかった。

サフランの考えでは、何としても、一本を取つてしまいたい。

そういうた気持ちもどこかにあつたのかもしれない。

サフランは、この試合を振り返つたとき、

『あの時は、どうかしていたのかもしれない。』

そう言ひように、自分でもあまり見たことの無いような試合内容だつたらしい。

確かに、一本取られてはいないながらも、攻撃を許した、というのは、精神的な動搖につながつたのかもしれない。

その動搖と、疲労がサフランをオカシクさせたのかもしれない。

それだけ、守りがあろそかになるほどに。

逆に、田中の方は、サフランよりはダメージが少なかつたらしい。ちなみに、休んでいた時間も、後半は、相手の研究につとめていた。田中は、試合を振り返つた中で、

『確かに、疲れはあつたが、そこに内容が伴つていた。』

この発言からも、一人のダメージの違いが見えてくる。相手の隙を明確に確認できるほどに。

『スパアアアン！』

部屋の中に大きな音が響きわたつた。

『ピーチ.』

それとともにブザー音がなる。

そのプレイは一瞬の出来事だった。

そしてランプは、何と、田中の方に点いた。

判定は、画うち。

両者とも、『有り得ない』というような顔をしている。この際、一人のあり得ないについての用法が違うことは、おわかりいただけると思うので、省略させていただぐ。

そして、モニターでは、リプレイが流れ始めた。

サフランの怒濤のラッシュの中、疲労であろう反動か、『ぐわづか』な時間だけ、間が空いた。

ちなみに、前述していたように、攻めに徹してしまい、守りがあるそかになっていたサフラン。

そこに田中がつけ込んだ。

その一瞬の間を見逃さず、綺麗な面うつ。

今度は、文句なしの一本勝ちである。

『勝者・田中』

モニターに、初めて田中の文字が踊った。

更に、その冠詞が『勝者』であるから、喜びもひとしお。

なお、ガツツポーズなどをしながら、喜ぶ田中を端から見て、敗北

をかみしめてこるサフランは、

『もうやめようかな?』

そう思つたサフランの脳内には、まだ『余裕』の一文字が踊つていた。

『勝者・田中』

稽古二回の結果は、一日田とは、正反対といつて言葉では、言い表せないことであった。

初めてサフランに勝つた田中は、下宿舎への帰り道の間も、舞い上がりは変わることとはなかった。

それどころか、その感情は、時間を追うごとに大きくなつていい。いる。

『あのサフランから、一本を取つた。』

その事実は、昨日の出来事が記憶に新しい田中にとっては、非常に大きなものだったのかもしれない。

あつという間に、下宿舎に着いた。

時間は、まだ午後3ラジアンを過ぎたばかり。
しかし、その時間帯に、下宿仲間の三人は、もう帰つてきていた。
そして田中は、この時初めて三人の名前を知ることになる。

「おうーす、ただいま。」

まずははじめに、意氣揚々とした声で中に入つていく。

「「「おかえりなさい。」」」

三人は声をそろえて、そう告げる。

三人は、どうやら宿題をしてくるようだ。

更に、言語が日本語と、田中には理解できる言語だったのと、何の勉強をしているのかは、はっきり分かる。

ここでは、田中のスポーツだけじゃない脳が發揮される。

「へえ、数学の宿題か……。お、懐かしいな。」

田中は、ずいずいと三人のやつてる宿題をみた。

「うわ、近代化過ぎだろ……。」

そこには、現在のアッ ルが出しているようなタブレット型PCを操っている姿が。

「え? これが普通だぞ?」

確かに、地球でもこんなのが出回り、学校でも使われ始めているところもあるが、『普通』というとなると、少々違う感じもする。

「ほら、早くしないと、締切来ちゃうよ?」

この世界では、宿題はネットで提出している。それによって、出してない人が分かつたりするために、これに関しては、政府も関わっている。

「いや、わかんねえんだもん……。」

さて、宿題の内容に戻るわけだが……。

「なんだ? 数列か?」

いくらスポーツバカといえども、高木は高木、高木での勉強範囲は、お手の物である。

「俺が教えてやるよ。」

「本当か？」

田中がそつ指さると、三人は、田を輝かせたよつて、田中の元に群がつてくる。

『結局、全員わかんねえのかよ…。』

そつ思つたが、それを口にするよとはなかつた。

「いじせ、いじやつてだな…。」

「なるほど…。」

そんな四人の風景を、夕食の準備をしながら見ていたサフランは、

「だんだん慣れときはじめたな。」

四人には聞こえないくらいに、小さな声で言い、再び準備に戻つた。すると、数分もしないうちに。

「お前、ふざけんなよー。」

先ほどの場所から聞こえる怒号。

『もしかして、田中か？』

恐れていた事が起きたみたいな感じで、サフランは様子を見に向か

う。

しかし、当の田中は、ケンカをしている、とこいつはむしり、困つているような感じだ。

そのわけは、

「次は、俺が教えてもらつんだよ！」

「なに言つてんだよ！ 次は俺だ。」

「いや、まだ終わつてないから。」

三人が田中を巡つての喧嘩だつた。

その間に挟まれた田中は、喧嘩を止めようとするが、どこから止め良いか分からず、オロオロしている。この事態に、サフランは頭を抱える訳で。

「何やつてんだ……お前ら。」

もはや、ツツムの氣力さえ、奪われていた。

／＼＼

なんとか喧嘩は收まり、田中が勉強を教えていふと、あつとこいつ間に、夕食の時間になつた。

「ええ～つと、『トム』と、『スキ』と…『チビ』？」

田中が勉強を教えている間に、みんなから、名前を教えてもらつた。若干一名、納得しない名前があるようだが。

「ちよ…、『チビ』は勘弁してくださいよ。」「良いじゃないか。チビなんだし。」

「 そうですね。」

チビとこうつ名前に異議を唱えたが、スギにこまく言こぐるめられた。

こうやって、三人と一人の友好は、今後も続いていく。

（）

「 さて…。」

サフランがいきなり立ち上がった。

「 今日は何日だ？」

「 8月31日です！」

トムが手を挙げて、そう答える。

「 そう、ということは、明日は9月1日だ。」

「 更に明日は、土曜日です。」

サフランが言つた後に続いて、チビがこちらも手を挙げて告げる。

「 ならばやる」とは…。」

「 ――「ひとつ…。」」「

サフランのための後、四人は、一齊にかけ声を出した。ただ一人、全く状況を把握できていない田中を除いて。

「 え？ ちよ、何があるって言つんですか？」

全く意味の分からぬ田中は、まだ円陣を組んだままの四人に、助けを求める。

「ああ、言つてなかつたな。」

「明日は、衣替えの日なんだ。」

「しかも、ここは寮なら、全員参加でなくてはならない。」

前半の三人だけで話が終わってしまい、何の補足情報も言えなかつたスギを除いた三人の説明によつて、ようやく先ほどの謎の円陣の意味が分かつた田中。

「ほら、お前も。」

サフランが田中を手招きする。

田中は、四人の元へ行こうて、
巴陣に加わる。

「よし、じゃあもう一回。」

サフランがそのごくひと、みんなはサフランを見る。

『ノルマニ』

サフランが大きな声で叫ぶ。

それを聞いたほかの四人は、一齊に叫んだ。
そのまま、この夜は更けていった。

時は、新暦526年9月1日。

サランダ帝国では、衣替えの季節になった。

だいたいの家庭は、このちょうど初日の口に、全ての準備をすませている。

そして、それはここでも…。

「おはよう」や「おまへす。」

まだ、朝の5ラジアン過ぎだといつのに、目覚めすつきりに起きてきた田中。

しかし、それでも、起きてきた順番は、最後だった。

更に、「遅い」とまで言われる始末。

田中は、この国の寝起き事情には、まだついて行けてない。

『昨日は、「てっぺん」越えてなかつたつけ?』

てっぺん、つまり日付が変わるまで、五人でワイワイしあつた中、朝、この時間帯にすでに起きているといつのは、いかほどの睡眠時間なのかは、容易に想像は出来る。

しかし、少なくともそんな生活は自分は出来ない、と田中は静かに思うのである。

何はともあれ、田中は席について、みんなとは少し遅い朝食を取る。その間に四人は、自分の区域を確認している。

サランダ帝国では、日本でいう大晦日近くになると、大掃除と称して、家の中を綺麗にする、ということはしていない。

だが、その代わりに、こういった衣替えの時に、大掃除のよつなこ

とをするのが、一般的だ。

つまり、衣替えは、春と秋の年一回。よって、大掃除よりも、間隔が短いといつことになる。

「御馳走様。」

今日の朝食は、パワーを付けるために、肉系が多かったが、別につこくなく食べられた。

これが、料理のうまい人が作る飯である。

「じゃあ、早速やり始めるか。」

食器を洗い終えた田中が、リビングに戻つてくると、サフランが開始の合図をする。

田中は、朝食を食べながら、自分の区域を聞いていたので、どこをやるかは、だいたい分かっている。

しかし、田中は向こうから見れば、異世界の人。

つまり、田中から見れば、異世界の場所。

こつちに来てから、驚かせられつ放しの田中にとっては、『今度は何に驚かせられるんだ?』と、少し恐怖もあつた。

（――）

遂に、サランダ帝国の恒例行事である『衣替え』が始まった。

最初は、日本の『衣替え』と同義である、服の入れ替えが始まる。

サランダでは、不思議なことに、あまり夏服と冬服で大きな差は見られない。

衣服の技術の進歩による結果だろうか、夏服には、風が通りやすいような加工を、冬服には、熱を逃がしにくくする加工を施している。まるで、コクロのようだ。

しかし、それだけではなく、少しばかり気候も関係しているらしい。ここにサランダは、高層ビル群が立ち並ぶといつても、何も考へずに、バンバン建てているわけではない。

ちゃんと、近代都市らしく、風の通りなどを計算して建てているらしい。

更に、それは国が厳しく管理しているらしい、計算と合わないところに建てようものなら、どれだけ重要な建物であっても、建ててはならない。

そんな理由があつてか、夏用と冬用で、あまり差がないのだ。

「ええ～っと、こいつちが夏用で、…これが冬用」

ちなみに、上記と同じような理由で、春用・秋用といったものは、一切ない。

現在田中は、ズボン類を夏と冬に仕分け中。
勿論、仕分けているのは、初田にみんなからプレゼントされた物である。

前述したように、夏用と冬用の服の違いは、外見からは、見抜くことは出来ない。

ならば、田中はどうやって分けているのか…。
答えは簡単。

「これは、『太陽』だから、夏服。『月』は、冬服。」

そつ、サランダの服は、外見では見分けがつかないために、服の柄の一部、または、タグに『太陽』『月』のマークがつけられている。どつちがどつちかというと、先ほど田中の言つたとおり、太陽が夏

服、月が冬服。

こうやって、昔からサラソーダの人は、分けていたらしい。

（――）

さて、服の仕分け作業も終わり、これから大掃除に入る。ほかの四人は、早くも掃除に取りかかっていたり、衣替えの終盤と言つたり、それぞれ速さはマチマチである。

田中の持ち場所は、やはり初めてという事なのだろうか、少しだけみんなと少ない。

田中自身は、あまりそれを望んでおらず、むしろ『みんなと同量の仕事をこなしたい。』と言つたらしが、あえなく却下された。

しかし、その代わりといっては何だが、重要な仕事を任せてもらつた。

それは、水回りである。

ほかの四人曰く、

「あそこをクリアしたら、後は大丈夫。」

らしい。

ちなみに、田中も使つてゐるが、相当気合いを入れて掃除をしなければならないというのは、分かつっていた。

しかし、その前に任されていたのは、自分が使つてゐる部屋だ。

現在田中は、下宿舎での、それぞれの個室で、ちょうど一つだけ空いていたという、部屋を使用している。

部屋を使って、三日・四日だろうが使用者は使用者。しっかりと、掃除をしなければならない。

部屋には、ほとんど何もない。

あるとすれば、最初からついていた机、椅子、箪笥くらいである。勿論、田中は地球から『使えない時計』以外のものは持ってきてないし、ここで何かを自分で買いつぶと言つようなこともない。つまり、田中の場合、部屋の片づけといつよりは、使っていなかつたときに溜まつたであつて、埃取りといつたところだ。

田中は、あまり時間をかけずに、部屋の掃除を終わらせ、最強を誇る、らしい水回りへ行く。

しかし、そこで『田中×水回り』の『義無き戦い』が繰り広げられようとは、このとき田中は、頭の端にも、置いていなかつた。

今日は、9月1日。
サラランダ帝国では、年二回行われる、衣替えを迎えていた。
現在の進捗度は、田中が、最強と謳われる水回りに挑むところだ。

（――）

「これはひどいな…。」

そこには、共同の洗濯機や、洗面所などが、毎日使っているのだが、改めて見ると、色々と汚いままであった。

今までには、皆辛うじてクリアしてきたらしいのだが、半年もすれば、ひどい有様である。

とはいって、自分でやると決めたこと。
いつまでも呆然とするわけにはいかない。

「よし、やるか。」

田中は、ついに決心した。

未だ、どこからどう手をつけて良いのか分からぬまま、始まった挑戦とも言える掃除は、早くも田中に汗をむく。

「最早…、どうしたらいいんだ？」

水回りとして任せられているのは、洗面所一帯の部屋で、お風呂は含まれていないので、それでも所々に、いろいろこびりついていたりする。

田中は、この膨大な仕事に為す術が見つからない。

しかし、そのときふと、

『無闇にしそうとしないで、ビルからやれりとか、順番を決めると良い。』

スギのアドバイスが思い浮かんだ。

一番頑張りやせんのスギは、昔から率先して、工事を任せられたりつていたらしい。

その一番の経験者のアドバイスは、後々に強い味方になる。

「よし、やるか。」

一度目の声。

そして今度こそ、田中は作業を開始した。

田中は、いろいろと物が少ない南の方角から、始めていく。

しかし、南の方は物が少ないながらも、お風呂に近いところともあって、床や壁などに、水滴から出来たのだろう、水垢がポツポツとある。

それだけならまだ良いのだが、厄介なのは、天井にも付いてる」とだ。

天井なら、手に持っている雑巾でも届かないし、ましてや、お掃除ロボットなど以ての外だ。

更に、天井の色が黒いために、よけいに目立つたりする。

「どうしようかな……。」

いきなりの大きなクエスチョン。

ひとまず田中は、床や壁に付いた物を先に除去してから、じっくりと考えることにした。

しかし、良い考えが浮かばない。

その時、洗面所から廊下につながる扉が開いた。

「お、ちちさんとやせてるじちゃん。」

それは、じいじの区域を何度も担当したことがあるスギだった。

現在の田中は、壁と床の水垢を落としたところ。

言うなれば、これから、天井のそれをどうやって落とそうかと考えあぐねてこりとこりだ。

「あれ、どうしたらいいんだ？」

こっちに向かってきたスギに向かって、田中は質問する。
もちろんあれとは、天井の水垢のことである。

「あ～あれは、どうにもならな～な～。…確か～に～。」

そりやうじて、色々と「ポン、ポンしながらスギが出してきた物は、四本の棒だ。

更にその一方は、一つの場所にまとまり、もう一方は、丁度正方形の頂点の場所に来るような物だ。

しかし、こんな物をいつたこどのように使つのだらうか…。

「いりやせつて、それ！」

何と、スギは開いている側の先に雑巾を広げ、逆の先端を持って持ち上げてしまった。

「いりやせば拭ける。」

そして、先端が天井に付いた途端に、棒を天井にすり付けるような形で、前後に振った。

すると、綺麗に水垢が取れてしまった。

「へえ～、すごいな。」

田中は感心するように、その一部始終を眺める。

「ほら、お前も使ってみろよ。」

スギは、半分くらいの水垢を取ってしまった時に、田中にその棒を渡した。

「……、おお、サクサク取れる。」

田中も実際に使ってみるが、思ったより簡単に取れる。

「おう、頑張れな。」

そう言つと、まだ仕事が少し残つてゐるらしく、すぐに自分の持場に戻つていった。

スギが戻つていった数分後には、天井にこびりついた水垢は、すべて取れてしまつた。

「あんなに、いっぱい付いていたのに……。」

取る前と取つた後では、天井の色が違つのではないか、という位である。

更に、全体的な印象からしても、部屋が少し明るくなつた感じがす

る。

「じゃあ次は……。」

田中が見回していると、ある一点だけ妙に汚れが目立つところがあつた。

「ん~……やるか。」

田中は少々思案したが、観念したといつよつと、そこに向かつていつた。

そこといふのは、具体的には、洗濯機の周りである。だが、やはり『男の洗濯』の為なのだろうか、洗剤を置いた辺りは、零れた洗剤などで、ベトベトになつていた。

「…J…これは。」

実は、みんなのために、個人の洗剤入れがある。

これは、自分の好みなどもあるかもしれないのだが、やはり服との相性などもある。

ちなみに、サラランダの人々は、服を買つ際には、同時にその服にあつた洗剤も買つらし。

その背景には、洗剤が服の材質によつて大きく左右されるといつこともあるらしい。

効果を求めるすぎた現代人が、その材質専用の物を作つてしまつたとの意見もある。

まあ、そんな感じで、洗剤が大量にある。

田中は、まだここに住み始めて数日しか経つていないので、そんな

に汚くはないのだが、ほかの四人の有様がひどかった。

「え？ これどうなつてんの？」

このような発言が出てしまつまどい。

「え? これどうなつてんの?」

田中はさう発たずにはいられないほどの驚愕の事態が起つっていた。

「ちょっと…、これは…。」

田中も言葉が出ない。

その田中の目の前に、広がつていた光景はあまりにも收拾がつかない事態になつていた。

「へへ、取れない…。」

取れないのは、洗剤の容器である。

何故ならば、零れた得体の知れない液体が、その容器の下で、固まつてしまつていてる。

更に、何と何が混ざつたのかは、定かではないが、強力な粘りを生んでしまい、容器たちが全く洗剤入れから離れようとしてくれない。また、その容器たちをよく観察してみると、どれもこれも『混ぜるな、危険。』系統の記述、もしくは、それよりもヤバい表現が使われていてる。

有毒ガスが出ていない事に、感心していたが、それ以上に、その凶悪なフュージョンにも負けなかつた、洗剤入れに、感心していた田中。

再び大きな課題にぶち当たつたというのは、言つまでもないところである。

「さて…これをどうするか…。」

ひとまず、やらなければならぬことを整理するとしたら、

- ・洗剤入れと、洗剤の容器を適切に切り離すこと。
- ・丁寧に洗い、得体の知れない混合物を処理する。
- ・得体の知れない混合物が触れた場所をチェックする。

この三つの手順が最重要課題となるだろう。

しかし、田中は、その一つ田から一苦労である。

『ガツガツガ。』

既に、適切に分離する時点で、違つような音を出している。その混合物は、本当に強いらしく、限界まで引っ張つてから、少し鋭利なもので、接着面を切り離している。

幸い、何も『荒れ』などが見当たらないことから、そんなに危険な組み合わせでもなかつたらしい。

しかし、これは後から聞いた話なのだが、もう一つ、違つた薬品が混ざると、『荒れ』とかいう問題ではすまなかつたらしい。どうやら、命拾いをしたようだ。

しかし、どうにもこうにも効率が悪い。

確かに、薬品の混合とこう問題上、無闇に何かを使うといつのは、少し出来ない。

だが、如何せん強固な粘りがある中、それを一人で、しかも撃てのみで剥がそุดなんてことは、少し無理がある。

「あ～、しんどい……。」

半分を過ぎた辺りから、田中の顔に疲れが出来てきた。

田中が言うには、一人ごとに段々と、粘りが更に強くなっている。そのためか、疲労度が増した体では、剥がすどころか、傷さえも入り辛いようになってしまった。

…と、その時である。

「オッス、やつきから苦戦しているみたいだな？」

扉の向こうから現れたのは、トリオの中で、一番力持ちのトム。だが、トムの口振りを見てみると、いかにも先程から様子を伺っていたような感じだ。

「お前…、見てたのか？」

田中が気になつた感じで、聞いてみた。すると、トムは焦つたような感じで、

「え？いや、そ…んな事は、ない…かな？」

答えが曖昧である。

そして、田中の鋭い質問をしたときに、扉から少し大きな音がしたのは、田中は気付かなかつた。

「そ、そんな事より、手伝つからひ、早く取つまおうぜ。」

トムは急いで話を進める。

「ん？ああ、そうだな。」

別に、田中は気にしないで、次に進めることにした。

「これか？」

トムは、現在の進涉度を見てみる。

トムは、例の粘りを引っ張つてみるが、一番力持ちのトムでさえも、剥がれそうにはない。

すると、その光景を見ていた田中は、こんな提案をしてみた。

「なあ、そのまま引っ張つていてくれない？」

つまり田中は、トムが持ち上げたところに、田中が鑿で取る、という連携である。

「いづか？」

早速、トムはそれを持ち上げてみる。

すると、剥がれはしないのだが、少し鑿を入れられそうな位の場所が出来た。

トムによれば、かなりの反発力があるのだが、そこは一番の力持ち、しっかりと持ち上げた位置をキープしている。

「よし、ナイス。」

その光景を見た田中は、そういうて、その場所に鑿を入れ始めた。

『ガツガツガツ。』

同じような鑿の入れ方をしても、はかどりよつは一目瞭然だった。

『ガツガツガツ、ベリッ！』

今までの約半分から三分の一の時間で、一つの容器の救出に成功した。

そのまま全部取つていくると、あつとこつ間に全ての容器を救出することができた。

しかし、これだけでは、終わらない。

「じゃ、これを洗つのも手伝つてもらおうかな?」

田中は、とにかく使つもつらしく。

つこでに、容器の洗浄の手伝いも申し込んだ。

「別に構わないけど……。」

トムは、一つ返事でOKした。

「じゃあ、俺はこの入れ物でも洗おうかな?」

田中は、やけに声を張つて、主張する。
しかし、田中の足は、その入れ物とは、まったく別の方向に進んでいた。

（緊急ニュース）

この小説の累計PV数が、10,000PVを超えました。
(やったー！)

これに伴い、現在行つてゐる日常編の後にある、全国大会予選編で、
一日一話じみと云ふ無謀な挑戦をしてみたいと思つます。

日程、時間帯など詳しく述べ、追々「後書き」で、記載させていた
だきます。

みなさん、どうもありがとうございました。
また、今後とも、よろしくお願いいたします。

著者・谷口エイジ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9761t/>

異世界ファイター

2011年10月10日10時08分発行